

西部第一落合遺跡群（4）

前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 2

前橋市教育委員会

西部第一落合遺跡群（4）

前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 2

前橋市教育委員会



調査区全景（南西から）



DB-3号木棺墓全景（南東から）



調査区全景（上が北）

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中核として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する西部第一落合遺跡群（4）は古代上野国の中核地域の調査であり、上野国府推定域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めています。今回の調査では、平安時代の竪穴建物跡を主体とする集落跡が見つかりました。この中からは、国府の役人が身に着けていたと考えられる腰帶の装飾具、巡方と丸鞆が出土しています。こうした成果の積み重ねが、「国府の解明」に繋がるものと確信しております。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和4年3月

前橋市教育委員会
教育長 吉川 真由美

例　　言

1 本報告書は前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う「西部第一落合遺跡群（4）」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査および整理作業の体制は以下の通りである。

遺跡名	西部第一落合遺跡群（4）（包蔵地名 前橋市 0134・0929 遺跡）
遺跡コード	3 A 269
遺跡所在地	群馬県前橋市元総社町 749、751-1、751-2
監理指導	寺内勝彦（前橋市教育委員会）
調査担当	岡野 茂（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	令和3年10月11日～令和3年11月30日
整理・報告書作成期間	令和3年12月 1日～令和4年 3月25日
発掘調査・整理作業参加者	
	大川明子 佐野良平（技研コンサル株式会社）
	安藤三枝子 砂盃ありか 小田切幹緒 岡 真 岡部四郎 岡本陽一 金井美由紀 北爪二郎
	指田来実 杉田友香 田代京子 田代光男 立川千栄子 田所順子 中嶋知恵子 西山康子 福田邦弘
	細野竹美 山口拓郎 吉浦英和

3 本書の編集は岡野が行い、原稿執筆についてはIを寺内、II～Vを岡野、VIを佐野が担当した。

4 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会で保管されている。

5 下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

山下工業株式会社

凡　　例

1 押図中に使用した北は座標北であり、座標については日本測地系に基づく平面直角座標第IX系を使用した。

2 押図に国土地理院発行1/25000「前橋」、前橋市発行1/2500都市計画図を使用した。

3 造構名称は、堅穴建物跡：H、堅穴状造構：T、道路状造構：A、溝：W、井戸：I、墓壙：DB、土坑：D、ピット：Pである。

4 造構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

造構 堅穴建物跡、堅穴状造構溝、道路状造構、井戸、土坑、ピット・・・1/60

墓壙・・・1/30、1/60、全体図・・・1/150

遺物 土器・・・1/3、1/4 銅製品、石製品・・・1/2

5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。

6 遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。その他各図トーンを参照されたい。

須恵器（断面）：■ 灰釉陶器（断面）：■ 煤：■ 軸葉範囲：■ 摩耗：■

目　　次

はじめに
　　例言・凡例

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 調査方針と経過	5
IV 基本土層	5
V 造構と遺物	5
VI まとめ	7
	29

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市長 山本 龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）が実施する前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴い実施され、3年目にあたる。本事業地周辺は、上野国府推定域が近接すること、北側では元総社蒼海土地区画整理事業に伴い、20年以上に亘り発掘調査が実施され、数多くの貴重な調査成果を得ていることなどから、濃密な遺跡地として認識されている。

令和3年8月25日付けで前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼書が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。令和3年10月5日付けで前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三者で協定を締結し、発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「西部第一落合遺跡群（4）」（遺跡コード：3A269）の「西部第一落合」は土地区画整理事業名を採用し、「（4）」は当該土地区画整理事業において4番目に実施した発掘調査として付したものである。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

本遺跡が所在する前橋市元総社町は前橋市街地中心から南西約4kmに位置する。市街地西端にあたる場所で周辺には現在も畑地が多く見られる場所である。遺跡南東約200mには国道17号線高崎前橋バイパス、北側約200mには県道10号線前橋安中富岡線、西側約1kmには関越自動車道が南北に走っている。遺跡の東西には相馬ヶ原扇状地を源とする牛池川と染谷川が流れ、両河川に挟まれた地域に立地する。落合地区は榛名山南東に広がる相馬ヶ原扇状地から前橋台地といった平野部へと移行する地帯である。

本遺跡は令和元年度に調査された西部第一落合遺跡群（1）の西側、令和3年度に調査された西部第一落合遺跡群（2）の北側、西部第一落合遺跡群（3）の南東部に位置する。

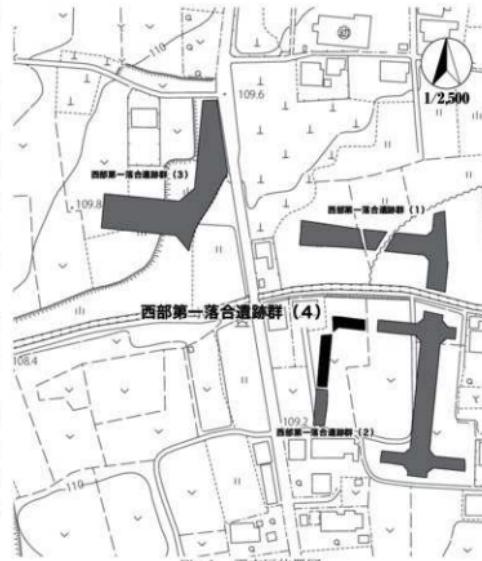


Fig. 1 調査区位置図

2 歴史的環境

前橋市の南西部に立地する本遺跡周辺地域は、上野国府推定地や上野国分寺・国分尼寺を中心に連綿と遺跡が広がる地域である。関越自動車道建設や元総社蒼海土地区画整理事業などに伴う発掘調査が行われ、多くの遺構・遺物が確認されている。本遺跡周辺地域での時代毎の遺跡の概要は以下の通りである。

(1) 繩文時代 八幡川右岸の微高地上に産業道路東遺跡〔19〕・産業道路西遺跡〔20〕、染谷川左岸自然堤防上に上野国分僧寺・尼寺中間地域〔27〕・元総社小見三遺跡〔13〕・元総社蒼海遺跡群〔24〕〔13〕、牛池川左岸自然堤防上に元総社蒼海遺跡群〔7〕・〔9〕・〔10〕〔13〕などが挙げられ、各遺跡で堅穴住居跡が確認されている。

(2) 弥生時代 当該期の遺跡は上野国分僧寺尼寺中間地域・正觀寺遺跡〔49〕などがあるが、その分布は散在的である。元総社寺田遺跡〔44〕では牛池川自然堤防上で後期の住居群が確認されている。

(3) 古墳時代 利根川右岸の地域は県内でも有数の古墳密集地域であり、代表するものとして總社古墳群が挙げられる。古墳時代後期・終末期に亘り、王山古墳〔7〕・愛宕山古墳〔8〕・宝塔山古墳〔10〕・蛇穴山古墳〔11〕などの首長墓が多数築造された。また、この時期には山王庵寺〔4〕が建立され、總社古墳群を含め、政治的中枢地域となる。この時代の集落は牛池川・染谷川沿いの自然堤防上に展開しているが、前期～中期の集落は散見される程度で、後期からの集落増加が看取できる。

(4) 奈良・平安時代 奈良時代には上野国府が造営され、上野国分寺〔2〕・国分尼寺〔3〕の建立に示されるように、本遺跡周辺は古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は元総社地域の区域に約 900m 四方に推定されている。関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡〔46〕では県下最大級の掘立柱建物跡が、元総社蒼海遺跡群〔99〕・〔127〕・〔136〕〔13〕、上野国府等範囲内容確認調査 28・33・34 ドレンチでは掘込地業を持つ建物跡が検出されている。元総社蒼海遺跡群〔9〕・〔10〕・〔95〕〔13〕では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。牛池川沿いの元総社明神遺跡〔2〕と元総社寺田遺跡〔3〕では人形が、元総社寺田遺跡では「國府」・「曹司」・「國」・「邑厨」などの国府関連施設名が書かれた墨書き土器が出土している。元総社明神遺跡では南北方向の溝跡、闇泉橋遺跡〔36〕や元総社蒼海遺跡群〔7〕・〔9〕・〔10〕では東西方向の溝跡が確認され、国府城の外郭線の想定が為されている。

本遺跡周辺では高崎市浜川町周辺から N - 64° E 方向へ東山道（国府ルート）が延びると推定されている。前橋市域では平成 28 年度上野国府等範囲内容確認調査 45 a・b ドレンチにおいて 2 時期の両側開溝を持つ道路跡を確認している。鳥羽遺跡でも 2 条の道路跡が確認されている。日高遺跡では幅約 45m の推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。西部第一落合遺跡群〔1〕〔52〕では推定東山道の駅路と考えられていた低地部から上幅 18 m、深さ 1.8 ~ 2.4 m の大型の溝が確認された。溝底面の出土遺物や覆土中に As-B が確認できることから古代の溝と想定されている。

当該期の一般的な集落は、牛池川と染谷川に挟まれた台地上に立地するが、国府推定域の中心部での分布は少なく、国府域と居住域の区分けが看取できる。近年の調査では元総社蒼海遺跡群（75 街区）No. 2〔13〕で鑄造遺構を伴う工房跡が検出され、小金銅仏・三鉢杵・銅印の鋳型と鑄造に使用した須恵器転用取瓶・壇場が出土している。元総社蒼海遺跡群〔145〕〔13〕ではビットから 11 世紀前半と考えられるかわらけ状の壺と共に小金銅仏（觀音菩薩立像）が出土している。元総社蒼海遺跡群〔141〕〔13〕では推定上野国府城を南北に縱断する道路状遺構の一部が検出されている。

(5) 中世 室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海域を本拠地としこの地を治めた。元総社蒼海遺跡群では蒼海城の堀跡が多く検出されており、12 ~ 15 世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋・持腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。天正年間以降は諏訪・秋元氏が蒼海域に入り当地の領主となるが、慶長六年（1601）に秋元長朝が總社城に移ると同時に蒼海城は廃城となった。

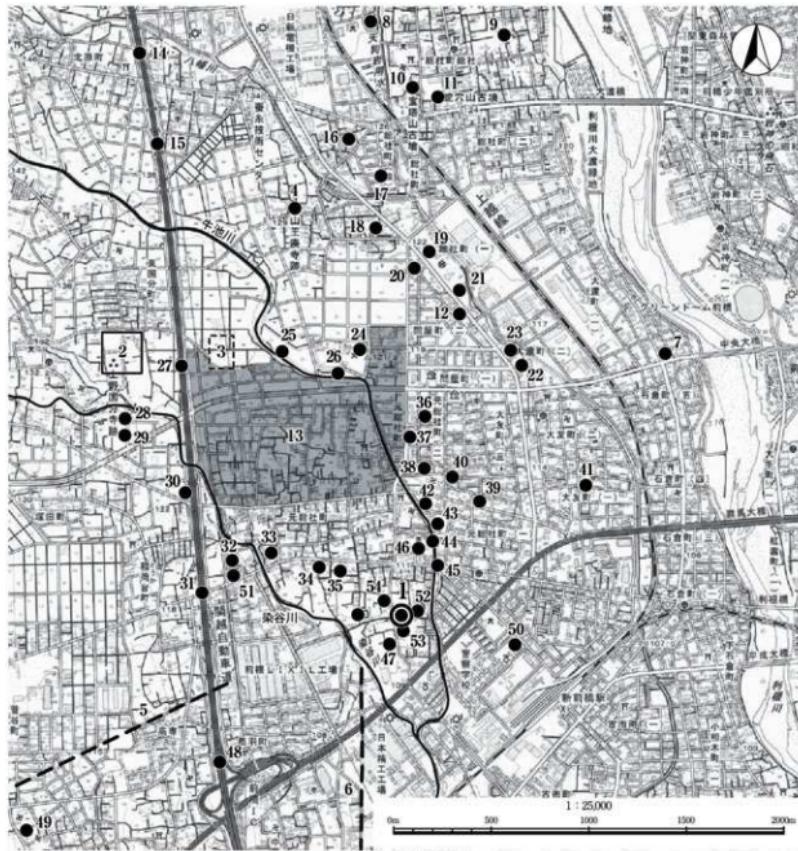


Fig. 2 周辺遺跡図

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	西部第一落合遺跡群（4）	15	国分寺遺跡 - Ⅲ・首道跡	35	天神目遺跡
2	上野分寺跡	16	東室遺跡	36	原京崎遺跡
3	上野別院跡	17	大河殿遺跡 I - V	37	西从猪南遺跡
4	山王寺跡	18	昌乗寺向山遺跡 - II遺跡	38	阿載遺跡 - II遺跡
5	兼定堂山造因寺ルート	19	兼定堂山造因寺遺跡	39	御越遺跡
6	兼定日吉遺跡	20	兼定日吉西遺跡	40	御越日吉遺跡
7	玉山左衛門	21	福原坂東東遺跡	41	大友宅地志遺跡
8	愛宕山古墳	22	大淀島遺跡	42	大友屋敷 - 目赤跡
9	義見山古墳	23	大淀島II遺跡	43	元祐社明治遺跡 I - III
10	宝塔山古墳	24	元祐社小学校遺跡	44	元祐社今田遺跡 I - III
11	蛇穴山古墳	25	元祐社志川遺跡	45	今田遺跡
12	福衝山古墳	26	元祐社牛塗川遺跡	46	元祐社小学校前遺跡
13	元祐社新井遺跡群	27	上野町所分寺 - 尾寺中町跡	47	元祐社西古遺跡
	元祐社小見通跡 - II - VI遺跡	28	元祐社川邊跡	48	中尾遺跡
	元祐社小見内通跡 - II - X遺跡	29	上野町寺參道遺跡	49	三藏寺遺跡 I - V
	元祐社草作通跡 - V遺跡	30	塙町土通遺跡	50	元祐社細井通遺跡
	松村町福衝山 - 造西遺跡 - II - IV遺跡	31	鳥羽通跡	51	元祐社供物遺跡
	松村町福衝山 - 造西遺跡 - II - V遺跡	32	供勒通跡 - Ⅲ遺跡	52	西第一 - 萩合遺跡群（1）
	元祐社宅地遺跡	33	元祐社牛塗乙跡	53	西第一 - 萩合遺跡群（2）
14	北原遺跡	34	天神遺跡 - Ⅲ遺跡	54	西第一 - 萩合遺跡群（3）

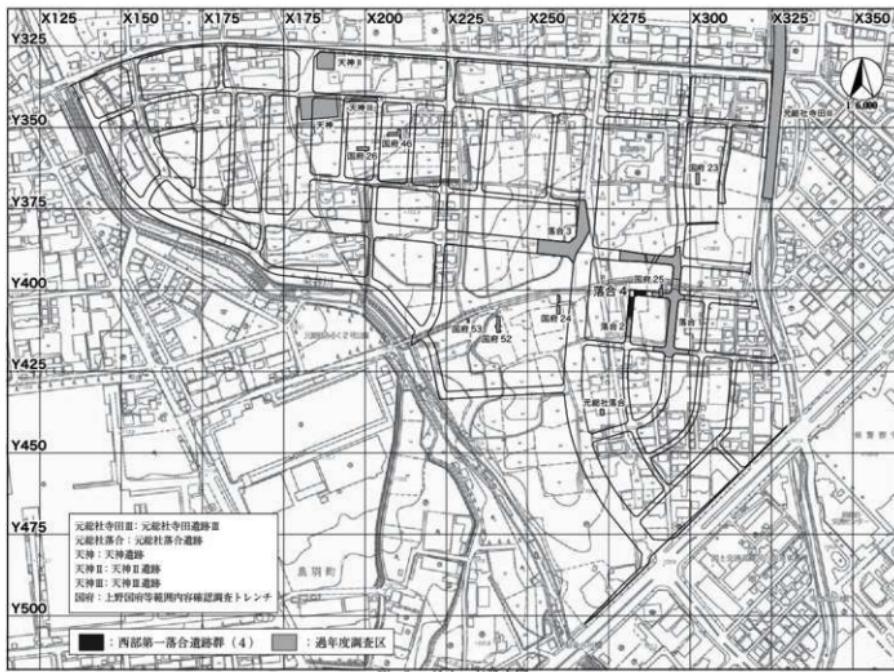


Fig.3 グリッド設定図

Tab. 2 西部第一落合遺跡群周辺遺跡一覧表

遺跡名	調査年度	時代:主な遺跡・遺物
天津遺跡	1986	奈良・平安:住居跡、井戸。土坑 ◇白磁・青磁・灰陶器
天津II遺跡	1989	奈良・平安:住居跡、井戸。土坑 ◇土器群・鹿鹿子・石器
元詮社寺田遺跡Ⅲ	1996	縄文:土坑・溝生:住居跡・古墳:住居跡、水田、島 崩壁。平安:住居跡、井戸、土坑。清:河原跡 中世:吉備外城。井戸 後代:近代、土坑、井戸。島 ◇御物御品・黒土器・青磁・刻文:刀削・鏡子等土器・綠釉陶器・灰陶器 白磁・四面(風扇・萬字・如意)・人形(馬形・牛形・羊形)・盾形・橫櫛・圓錐・秋葉狩形器・吉備白磁・石器、骨器
天津寺遺跡	2008	奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡、道路状遺構 中世:以降:鐵・銅・漆 ◇六棱鏡・綠釉陶器・大型円筒鉢・斑点器等
上野国伊勢範囲内宿禰調査トレントか23	2013	平安:住居跡、土坑、ビット ◇赤色土器・石器・灰陶器・灰瓦土器
上野国伊勢範囲内宿禰調査トレントか24	2013	中世:清・土坑 這跡(遺構:浜田御園の一部) ◇土器群・磁器・吉備白磁・瓦器・鐵器・骨器
上野国伊勢範囲内宿禰調査トレントか25	2013	平安:清・中世・土坑、ビット・落ち込み ◇吉備土器(木・本)・削り青石・瓦器・瓦器・鐵器・骨器
上野国伊勢範囲内宿禰調査トレントか26	2013	平安:住居跡、中庭・道路状遺構 ◇焼土器・灰陶器・鐵・瓦器等
奈良社周辺遺跡	2014	奈良・平安:住居跡、土坑 ◇織土器類(埴輪式)・土器群・磁器等
上野国伊勢範囲内宿禰調査トレントか46	2016	古墳:住居跡(4世紀代) 平成:平安:住居跡、清・土坑、ビット 中世:清・土坑 ビット群(掘立柱建物跡) ◇台付甕・灰陶器・綠釉陶器・吉備白磁(手水玉)
上野国伊勢範囲内宿禰調査トレントか52	2016	中世:清・ビット・跡跡不明:道路状遺構 ◇灰陶器・黑色土器・青磁・青白
上野国伊勢範囲内宿禰調査トレントか53	2016	近世:桑谷川田跡路
西部第一落合遺跡群(1)	2020	古墳・高麗・平安:笠穴式・圓窓式・井戸、土坑 中世:吉備外城 ◇瓦(削り大皿)・灰陶器・綠釉陶器・御物品・製陶品・瓦器 品(刀削器)・圓錐形・石塔・石碑
西部第一落合遺跡群(2)	2021	古墳・品跡・飛鳥-平安:笠穴式建物跡、土坑 中世:井戸、土坑、ビット ◇緑釉陶器・灰陶器
西部第一落合遺跡群(3)	2021	平安:清・井戸、土坑、削り窓 土器・盤・瓶、灰瓦・笠穴式建物跡、井戸、土坑、ビット 近世以降:道路・道路状遺構
西部第一落合遺跡群(4)	2021	古墳:清・良美・平安:笠穴式・圓窓式・井戸、土坑 土器、盤・瓶、綠釉陶器・灰陶器

III 調査方針と経過

委託調査箇所は前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業地内であり、調査面積は 272 m²である。グリッド座標については近隣調査との整合性や以後の拡張性を考慮して元経社蒼海道跡群の調査で使用されている任意グリッド座標（国家座標（日本測地系第Ⅷ区）X = 44000.000、Y = -72200.000 を基点とする 4 m ピッチのもの）を使用した。なお経線を X、緯線を Y として北西隅を基点に番付して呼称とした。公共座標は次のとおりである。

測点 日本測地系（第IX系） 世界測地系（第IX系 測地成果 2011）
X 283, Y 405 X = 42,380.000 m, Y = - 71,068.000 m X = 42,734.9272 m, Y = - 71,359.7778 m
発掘調査は重機で包含層（Ⅲ層）上面まで掘り下げ、包含層の遺物採取のため、人力で遺構確認面であるⅣ層上面まで掘り下げた。遺構確認作業において耕作跡を確認した。この耕作跡はⅡ層を掘りこんでいるため近現代に掘削されたものと考えられる。深さはⅡ層上面から 70cm 程度、底面に鉄分が沈着して暗赤褐色に変色するため耕作跡が縞模様となり、遺構確認が非常に困難であった。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、土層ベルトを適宜設定した。なお、出土遺物に関しては、床面直上や遺構に伴うと判断したものは No 遺物とし、他の覆土中の破片等については一括遺物として取り上げた。遺構の記録には、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集を行なった。記録写真は 35mm 判 モノクロ・リバーサルフィルムと、デジタルカメラの 3 種類を用いて撮影を行った。調査区全景撮影についてはドローンを使用した。

調査経過については以下の通りである。重機による表土掘削・堆土置き場及び駐車場の整地（10月12～15日）、包含層の掘り下げ調査（10月14～25日）、遺構確認調査（10月25日～）、調査区全景撮影（11月11日）、IV層掘り下げ調査（11月11日～）。11月19日埋め戻し作業を完了し、29日に現地での作業を終了した。

IV 基本土層

基本土層は調査区北側（T-1の側壁面）と南側（H-15の側壁面）にて観察を行った（Fig. 4）。I層土は現代の表土層、II層土は暗褐色のAs-B混土層である。III・IV層土は暗褐色土に焼土粒・炭化物を主に含み、土器片も混入する包含層である。V層土はAs-Cを含む黒色土、いわゆる「C黒」と呼称される土層である。W-2周辺では「C黒」上面において部分的にHr-FAを含む洪水堆積層が見られる。VI～VII層は非常に粘性の高い粘質土層である。

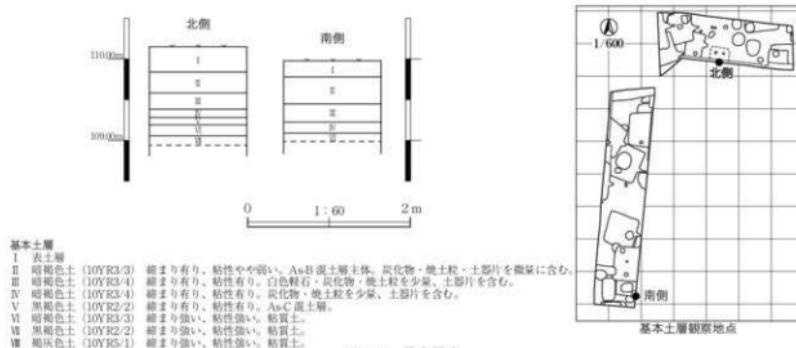


Fig. 4 基本層序

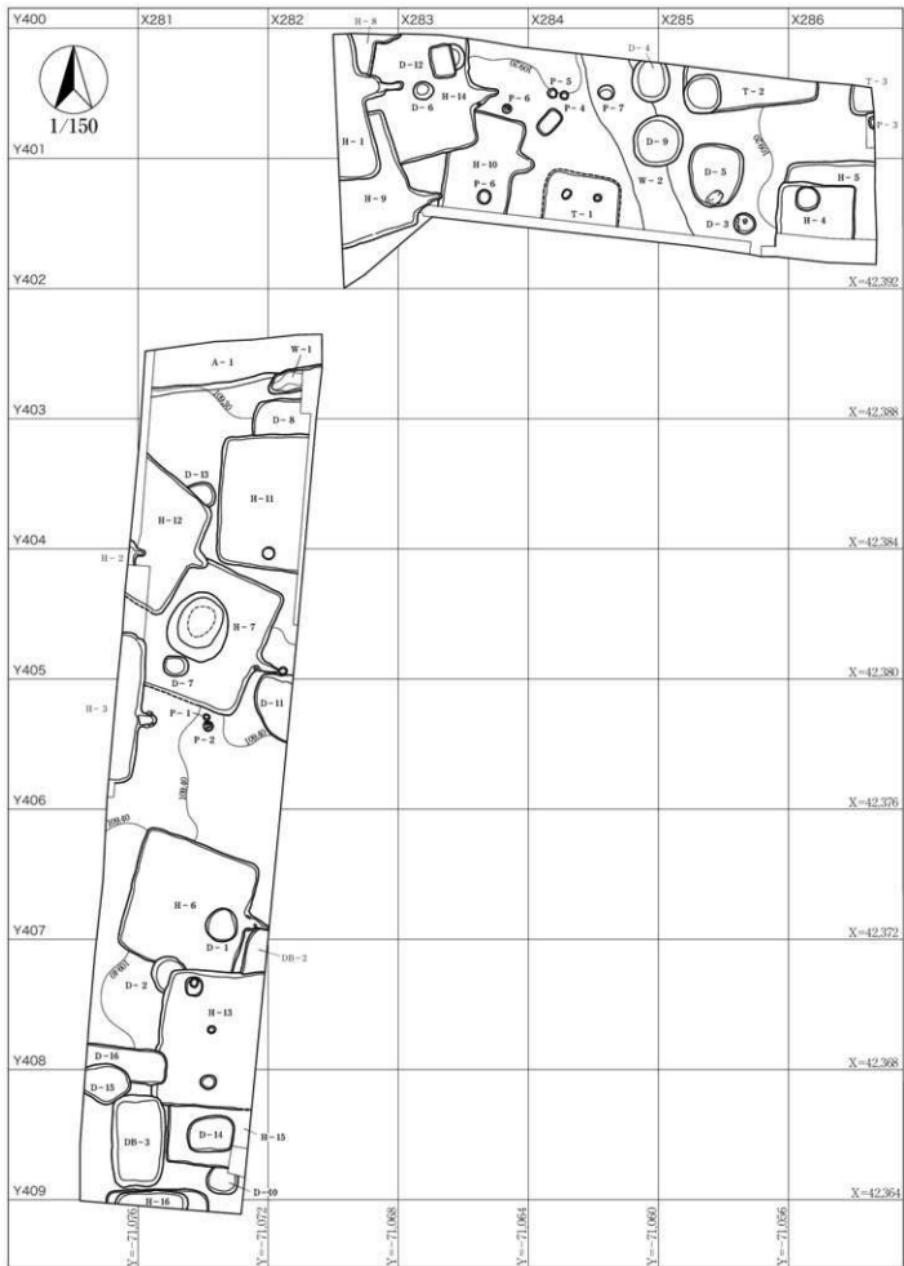


Fig. 5 調査区全体図

V 遺構と遺物

1 積穴建物跡

H-1号積穴建物跡 (Fig. 6・17、Tab. 4、PL. 2・6)

位置 X282・283、Y400・401 主軸方向 N-72°-E 規模 東西軸 (1.22) m、南北軸 (4.50) m 壁高 0.30 m 床面積 (4.78) m² 床面 地山床 重複 H-8・9・14 と重複。本遺構は H-8・9・14 より新しい。カマド 東壁中央に位置。隅丸長方形の燃焼部には炭化物・灰が少量広がる。燃焼部壁面が部分的に焼土化している。煙道は燃焼部から緩やかに上がり、側壁が焼土化している。出土遺物 須恵器壺 (1・2)、土師器壺 (3)、羽釜 (4) を図示。その他に須恵器壺、土師器壺、鉄釘が出土している。時期 出土遺物と重複関係から 10世紀前半と想定される。

H-2号積穴建物跡 (Fig. 8・9、PL. 2)

位置 X201・202、Y403・404 主軸方向 N-94°-W 規模 カマド煙道部のみ検出。東西軸 (0.52) m、南北軸 (0.77) m 壁高 0.25 m 床面積 (0.21) m² 床面 確認できず 重複 H-12 と重複。本遺構は H-12 より新しい。カマド 東壁に位置する。燃焼部底面には炭化物・灰、覆土中には焼土粒が確認できる。

出土遺物 須恵器・土師器の壺・甕が少量出土している。時期 重複関係から 10世紀と想定される。

H-3号積穴建物跡 (Fig. 8・9・17、Tab. 4、PL. 2・6)

位置 X280・281、Y404・405 主軸方向 N-80°-W 規模 東西軸 (0.83) m、南北軸 4.66 m 壁高 0.44 m 床面積 (3.67) m² 床面 地山硬化床 重複 H-7 と重複。本遺構は H-7 より新しい。カマド 東壁中央に位置。燃焼部側壁には長方形状の縦社砂層切り石が補強材として 2つ立つ。出土遺物 須恵器壺 (1)・壺 (2)、土師器甕 (3) を図示。その他に灰釉陶器壺や羽釜が出土している。時期 出土遺物と重複関係から 9世紀後半から 10世紀初頭頃と想定される。

H-4号積穴建物跡 (Fig. 7、PL. 2)

位置 X285・286、Y401 主軸方向 N-3°-E 規模 東西軸 2.38 m、南北軸 (2.01) m 壁高 0.25 m 床面積 (3.83) m² 床面 地山硬化床 重複 H-5 と重複。本遺構は H-5 より新しい。カマド 確認できず 施設 円形の土坑を 1 基確認。出土遺物 灰釉陶器壺、須恵器・土師器の壺・甕が出土している。時期 出土遺物と重複関係から 10世紀と想定される。

H-5号積穴建物跡 (Fig. 7、PL. 2)

位置 X285・286、Y401 主軸方向 N-3°-E 規模 東西軸 2.76 m、南北軸 (2.80) m 壁高 0.24 m 床面積 (2.98) m² 床面 地山硬化床 重複 H-4 と重複。本遺構は H-4 より古い。カマド 調査区南壁トレンチにて断面に焼土の広がりが見えることから、東壁（調査区外）にカマドが想定される。出土遺物 灰釉陶器壺、須恵器・土師器の壺・甕が出土している。時期 出土遺物と重複関係から 10世紀と想定される。

H-6号積穴建物跡 (Fig. 10・17、Tab. 4、PL. 2・6)

位置 X280・281、Y406・407 主軸方向 N-69°-W 規模 東西軸 3.70 m、南北軸 3.89 m 壁高 0.16 m 床面積 (14.16) m² 床面 地山硬化床 重複 H-13 と重複。本遺構は H-13 より新しい。カマド 東壁中央に位置。燃焼部側壁に縦社砂層の切り石が立ち、補強材としている。出土遺物 灰釉陶器壺 (1)、須恵器壺 (2) を図示。その他に須恵器皿、土師器の壺・甕が出土している。時期 出土遺物と重複関係から 10世紀前半と想定される。

H-7号積穴建物跡 (Fig. 8・9・17・18、Tab. 4、PL. 3・6)

位置 X280～282、Y403～405 主軸方向 N-65°-W 規模 東西軸 4.13 m、南北軸 4.27 m 壁高 0.16 m 床面積 (15.92) m² 床面 粘質土を充填し張り床をしている。重複 H-3・12 と重複。本遺構は H-

H-2より新しく、H-3より古い。カマド 東壁中央に位置。前庭部に天井崩落土が確認できる。燃焼部から煙道にかけての側壁が被熱し炭化している。出土遺物 灰釉陶器小瓶(1)、須恵器塊(2~4)、須恵器壺(5)、土師器壺(6)、銅製透迄(7)、石製丸鉗(8)を図示。その他に灰釉陶器壺、須恵器壺、土師器壺が出土している。時期 出土遺物と重複関係から9世紀後半と想定される。

H-8号竪穴建物跡 (Fig. 6, PL. 3)

位置 X282・283、Y400 主軸方向 N-85°-W 規模 東西軸(0.78)m、南北軸(1.28)m 壁高0.12m
床面積(0.87)m² 床面 地山硬化床 重複 H-1・14と重複。本遺構はH-14より新しく、H-1より古い。
カマド 調査区壁際で1/2確認。燃焼部に炭化物・灰が確認できる。出土遺物 須恵器・土師器の壺・壺が少量出土している。時期 出土遺物と重複関係から9世紀後半と想定される。

H-9号竪穴建物跡 (Fig. 6・7・18, Tab. 4, PL. 3・6)

位置 X282・283、400・401 主軸方向 N-74°-E 規模 東西軸(2.56)m、南北軸3.76m 壁高0.27m
床面積(5.65)m² 床面 地山硬化床 重複 H-1・10・14と重複。本遺構はH-1・10・14より古い。
カマド 東壁南隅に位置。燃焼部付近に炭化物・灰が多量に確認できる。煙道は燃焼部から緩やかに上がりながら東側へ延びる。出土遺物 須恵器壺(1・2)、土師器壺(3)を図示。その他に須恵器壺・瓶類、土師器壺が出土している。時期 出土遺物と重複関係から9世紀中頃と想定される。

H-10号竪穴建物跡 (Fig. 7・18, Tab. 4, PL. 3・6)

位置 X283・284、Y400・401 主軸方向 N-75°-W 規模 東西軸2.14m、南北軸3.01m 壁高0.06m
床面積(5.80)m² 床面 地山硬化床 重複 H-14と重複。本遺構はH-14より新しい。カマド 東壁に位置。梢円形を呈する燃焼部底面には炭化物・灰が僅かに確認できる。出土遺物 須恵器小皿(1)、土師器壺(2)、羽釜(3)を図示。その他に灰釉陶器壺が出土している。時期 出土遺物と重複関係から10世紀中頃と想定される。

H-11号竪穴建物跡 (Fig. 8・9・18, Tab. 4, PL. 3・7)

位置 X281・282、Y403・404 主軸方向 N-80°-W 規模 東西軸(2.70)m、南北軸4.17m 壁高0.16m
床面積(10.51)m² 床面 粘質土を充填し張り床としている。カマド 確認できず 施設 ピット1基確認。出土遺物 須恵器塊(1)、羽釜(2)を図示。その他に灰釉陶器壺、須恵器・土師器の壺・壺が出土している。時期 出土遺物から10世紀と想定される。

H-12号竪穴建物跡 (Fig. 8・10・18・19, Tab. 4, PL. 4・7)

位置 X280・281、Y403・404 主軸方向 N-46°-W 規模 東西軸(2.78)m、南北軸3.86m 壁高0.21m
床面積(7.43)m² 床面 地山硬化床 重複 H-2・7と重複。本遺構はH-2・7より古い。カマド 東壁中央に位置。出土遺物 土師器壺(1~3)を図示。その他に須恵器・土師器の壺が出土している。時期 出土遺物と重複関係から8世紀と想定される。

H-13号竪穴建物跡 (Fig. 10・11・19, Tab. 4, PL. 7)

位置 X281、Y407・408 主軸方向 N-83°-W 規模 東西軸(3.07)m、南北軸4.18m 壁高0.32m
床面積(12.78)m² 床面 地山硬化床 重複 H-6・15と重複。本遺構はH-15より新しく、H-6より古い。カマド 確認できず 施設 土坑2基、ピット1基確認。出土遺物 須恵器塊(1・2)、羽釜(3)を図示。その他に須恵器瓶類、土師器の壺・壺が出土している。時期 出土遺物と重複関係から10世紀初頭と想定される。

H-14号竪穴建物跡 (Fig. 6・7・19, Tab. 4, PL. 4・7)

位置 X282・283、Y400・401 主軸方向 N-74°-E 規模 東西軸(3.31)m、南北軸3.80m 壁高0.16m
床面積(10.45)m² 床面 粘質土を充填し張り床としている。重複 H-1・8~10と重複。本遺構は

H - 1・8・9より新しく、H - 10より古い。カマド 東壁に位置。炭化物・灰が僅かに確認できる。煙道は燃焼部から緩やかに上がる。施設 土坑1基確認。カマド脇にあるため貯蔵穴の可能性が考えられる。出土遺物 須恵器壺(1)、羽釜(2)を図示。その他に須恵器壺、土師器壺が出土している。時期 出土遺物と重複関係から9世紀末~10世紀初頭と想定される。

H - 15号竪穴建物跡 (Fig.10・11)

位置 X281、Y408 主軸方向 N - 81° - W 規模 東西軸(2.54)m、南北軸(1.81)m 壁高0.09m 床面積(4.13)m² 床面 地山硬化床 重複 H - 13と重複。本遺構はH - 13より古い。カマド 確認できず出土遺物 灰釉陶器壺、須恵器・土師器の壺・壺が出土している。時期 出土遺物から9世紀と想定される。

H - 16号竪穴建物跡 (Fig.11)

位置 X280・281、Y408・409 主軸方向 N - 89° - E 規模 東西軸3.14m、南北軸(0.68)m 壁高0.26m 床面積(1.64)m² 床面 地山硬化床 出土遺物 須恵器・土師器の壺・壺が少量出土している。時期 南側に隣接する西部第一落合遺跡群(2) H - 2と同一遺構と考えられることから、8世紀後半と想定される。

2 竪穴状遺構

T - 1号竪穴状遺構 (Fig.11, PL. 4)

位置 X286、Y400 主軸方向 N - 8° - E 規模 東西軸2.36m、南北軸(1.49)m 壁高0.02m 床面積(3.43)m² 床面 粘質土を充填し張り床としている。出土遺物 混入遺物と考えられる灰釉陶器や須恵器の小片が少量出土している。時期 覆土中にAs-B混土を含むことから中世と想定される。

T - 2号竪穴状遺構 (Fig.11・19, Tab. 4, PL. 4・7)

位置 X284、Y401 主軸方向 N - 4° - W 規模 東西軸4.13m、南北軸(1.48)m 壁高0.17m 施設南西隅に土坑1基。床面積(4.22)m² 床面 地山硬化床 出土遺物 土師器壺(1・2)を図示。その他に灰釉陶器壺や須恵器壺が少量出土している。時期 出土遺物から10世紀と想定される。

T - 3号竪穴状遺構 (Fig.11, PL. 4)

位置 X286、Y400 主軸方向 N - 3° - E 規模 東西軸0.70m、南北軸0.92m 壁高0.23m 床面積(0.58)m² 床面 地山硬化床 出土遺物 須恵器・土師器が少量出土している。時期 出土遺物も少ないため判然としないが9・10世紀代と想定される。

3 道路状遺構

A - 1号道路状遺構 (Fig. 8・9, PL. 1)

位置 X281・282、Y402 主軸方向 N - 81° - E 規模 確認長5.53m、幅(1.26)m 硬化面 全体的に硬化面が確認できる。重複 W - 1(中世)と重複。本遺構はW - 1より古い。出土遺物 須恵器・土師器の壺・壺が少量出土している。時期 重複関係から平安時代と想定される。

4 墓壙

DB - 1号土塚墓 (Fig.12)

位置 X284、Y400 主軸方向 N - 42° - E 規模 隅丸長方形を呈する。長軸0.86m、短軸0.51m 壁高0.07m 出土遺物 人骨1点出土。土器は出土していない。時期 覆土中にAs-B混土を含むことから中世と想定される。

DB - 2号土塚墓 (Fig.10~12, PL. 7)

位置 X281・282、Y406・407 主軸方向 N - 12° - E 規模 隅丸長方形を呈する。長軸(1.52)m、短軸(0.70)m 壁高0.14m 重複 H - 6・13と重複。本遺構はH - 6・13より新しい。出土遺物 人骨1点出土。その他に混入遺物と考えられる10世紀代の灰釉陶器・須恵器の壺が出土している。時期 覆土中にAs-B混土を含むことから中世と想定される。

DB - 3号木棺墓 (Fig.12 ~ 14・19、Tab. 4、PL. 5・7)

位置 X280・281、Y408 主軸方向 N - 1° - W 規模 圓丸長方形を呈する。長軸 2.82 m、短軸 1.63 m
壁高 0.49 m 構造 側面は 5 ~ 20cm の川原石を用いて組み上げている。木棺が収まり易いように面を揃えようとしている造作が窺える。底面には 30cm 大の扁平な川原石を並べ平坦に敷き、隙間に小石を詰めている 木棺 推定規模は長さ 2.08 m、幅 0.60 m、高さ 0.47 m。⁽¹⁾ 重複 H - 13 と重複。本遺構は H - 13 より新しい。
出土遺物 灰釉陶器塊（1）、小塊（2）、須恵器塊（3）を図示。鉄釘が多く出土している（16点。断面角状。少片含む）。そのほとんどが石組み側壁近くからの出土であること、木質を含んで鋳化していることから木棺に打たれていた釘であると考えられる。その他に灰釉陶器塊や須恵器塊・塊の破片が多く出土している。残存率の高い遺物は出土分布が北側底面付近に集中していることから、被葬者の頭部付近に埋納された土器の可能性が高い。人骨の出土はない。
時期 出土遺物から 10 世紀前半頃と推定される。
備考 檜出当初は石組みの井戸や古墳の石室の可能性を考えたが、灰釉陶器・須恵器や鉄釘の出土状況から土壙墓と認定。また側面部に石を組み、底面に扁平な石を敷いていることから、礫櫛木簡墓と想定した。

5 溝・井戸・土坑・ピット (Fig. 8・9・12・14～16・19～21、Tab. 3・4、PL. 3・4・7・8)

各遺構の計測値は「Tab. 3 遺構計測表」を参照。I - 2、D - 1・2、P - 1・2・6 は覆土中に As-B 混土が混入するため中世に帰属すると想定される。D - 3 は壠上面が焼土化し總社砂層の柱状ブロックや瓦の破片が出土している。焼跡の可能性が考えられる。

註

1. 木棺の高さは現代の棺の一般的な規格（長さ 1.80 × 幅 0.48 × 高さ 0.41 m）の比率から算出している。あくまでも参考値。

Tab. 3 遺構計測表

溝

遺構名	グリッド	主軸方向	縦深度 (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	断面形状	備考
W - 1	X281・282、Y402	N - 71° - E	1.66	0.70	0.60	0.15	逆台形	中世。覆土に As-B 混土を含む。
W - 2	X284・285、Y400・401	N - 19° - W	6.20	1.65	0.50	0.38	弧状	古墳時代。覆土に As-C 混土・Hr-Fa 混水層を含む。

井戸

遺構名	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	確認深度 (m)	平面形状	出土遺物	備考
I - 2	X281、Y404	2.05	1.77	0.91	楕円形	灰釉陶器、絆釉陶器、須恵器	中世

* I - 1 は欠番。

土坑

ピット

遺構名	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状	備考	遺構名	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状	備考
D - 1	X281、Y406・407	1.03	0.96	0.31	円形	中世	P - 1	X281、Y405	0.19	0.19	0.27	円形	中世
D - 2	X281、Y407	1.11	1.05	0.14	円形	中世	P - 2	X281、Y405	0.29	0.29	0.32	円形	中世
D - 3	X285、Y401	0.66	0.62	0.18	円形	焼跡	P - 3	X286、Y400	0.38	0.17	0.24	円形	
D - 4	X284・285、Y400	1.20	1.15	0.35	梢円形		P - 4	X284、Y400	0.25	0.24	0.09	円形	
D - 5	X285、Y400・401	1.93	1.68	0.14	梢円形		P - 5	X284、Y400	0.30	0.29	0.16	円形	
D - 6	X283、Y400	0.62	0.54	0.17	円形		P - 6	X283、Y400	0.27	0.27	0.23	円形	中世
D - 7	X281、Y404	0.27	0.61	0.51	長梢円形		P - 7	X284、Y400	0.49	0.43	0.35	梢円形	
D - 8	X281・282、Y402・403	1.96	1.10	0.17	長方形								
D - 9	X284・285、Y400・401	1.56	1.52	0.22	円形								
D - 10	X281、Y408	0.95	0.88	0.07	楕丸形								
D - 11	X281・282、Y404・405	2.07	1.16	0.14	梢円形	出土土器多量							
D - 12	X283、Y400	1.02	0.71	0.22	長方形	土壙墓							
D - 13	X281、Y403	1.02	0.81	0.09	楕丸形								
D - 14	X281、Y408	1.43	1.09	0.10	長梢円形								
D - 15	X280・281、Y407・408	1.43	1.20	0.25	梢円形								
D - 16	X280・281、Y407・408	2.49	1.02	0.11	長方形								

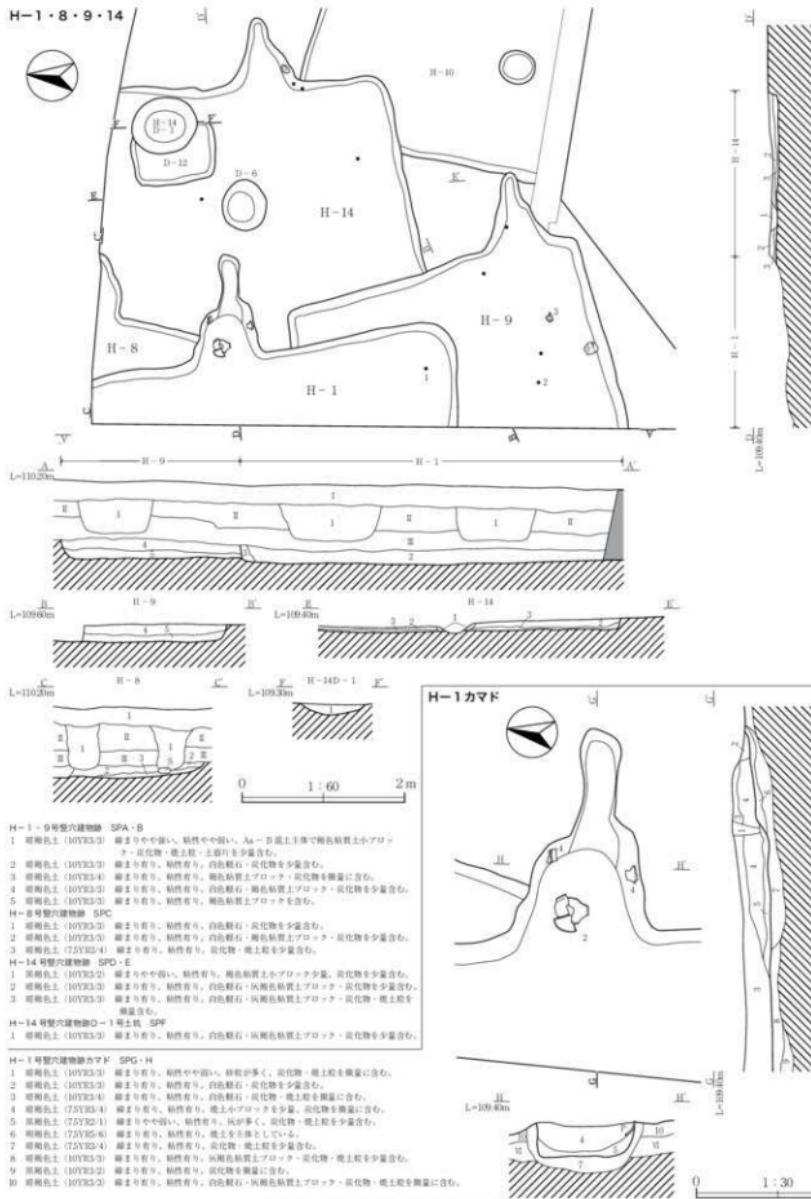


Fig. 6 H-1·8·9·14号竖穴建筑物跡

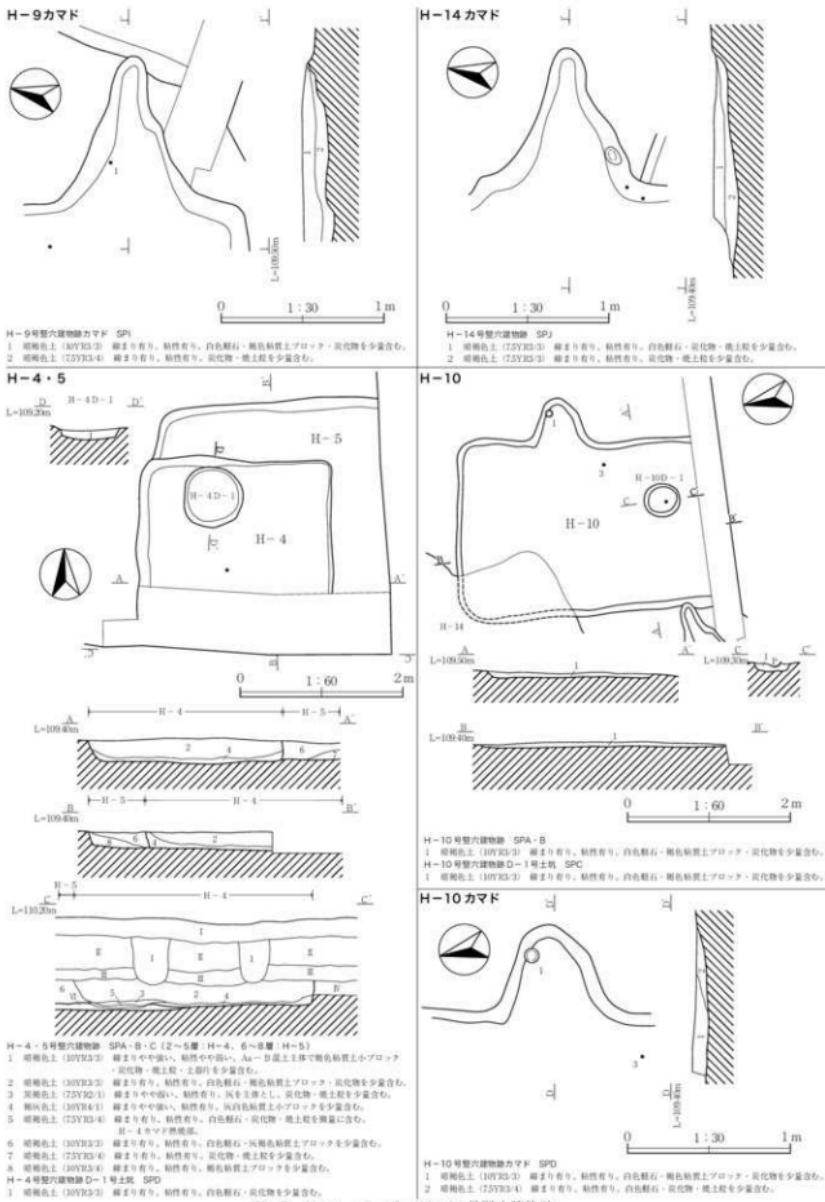


Fig. 7 H-4・5・9・10・14号窓穴建物跡

H-2・3・7・11・12、A-1、W-1、D-8

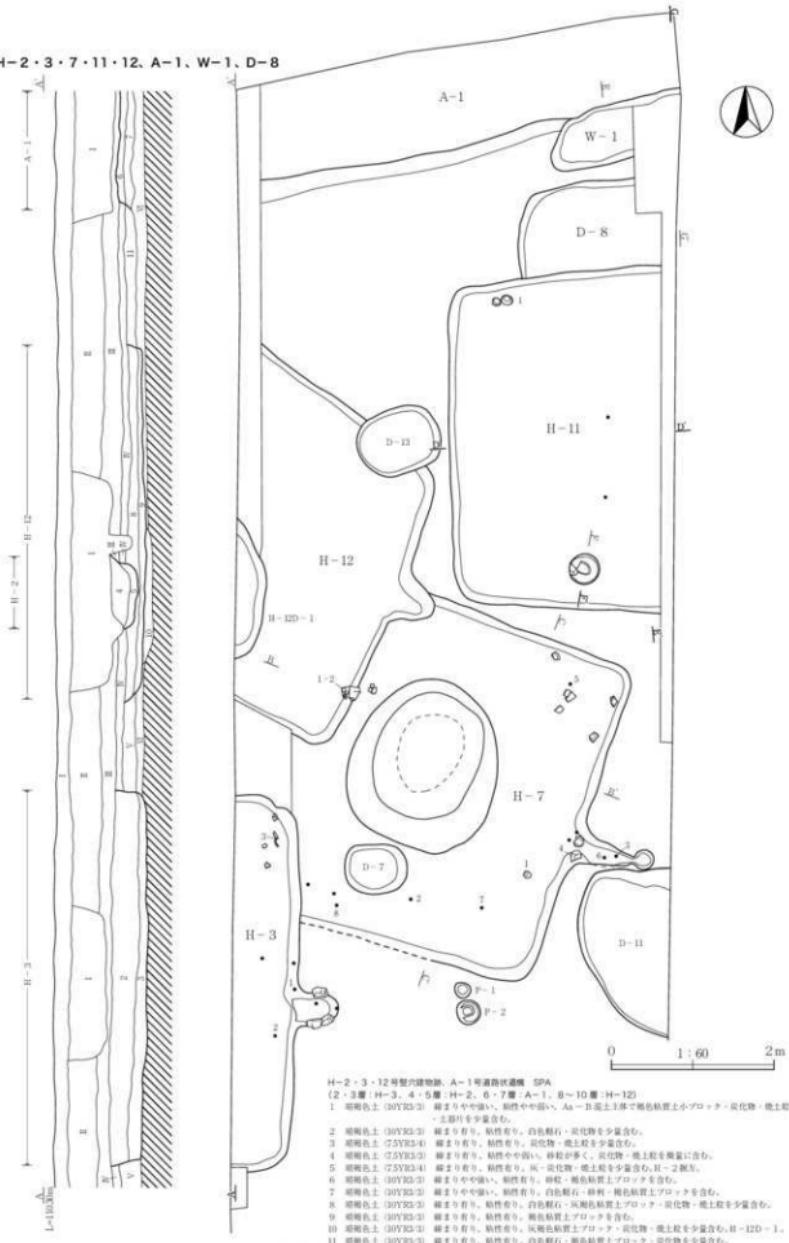


Fig. 8 H-2・3・7・11・12号堅穴建物跡、A-1号道路状況図、W-1号溝、D-8号土坑（1）

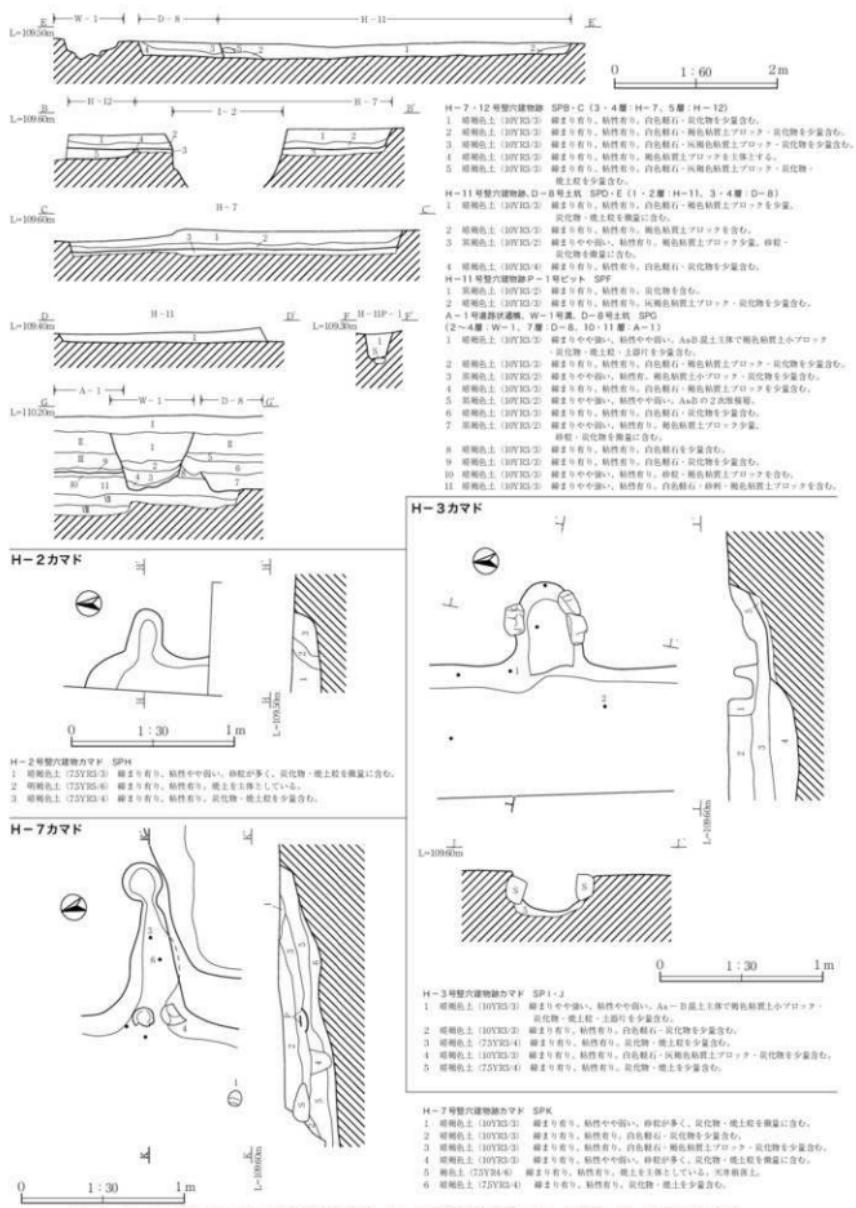
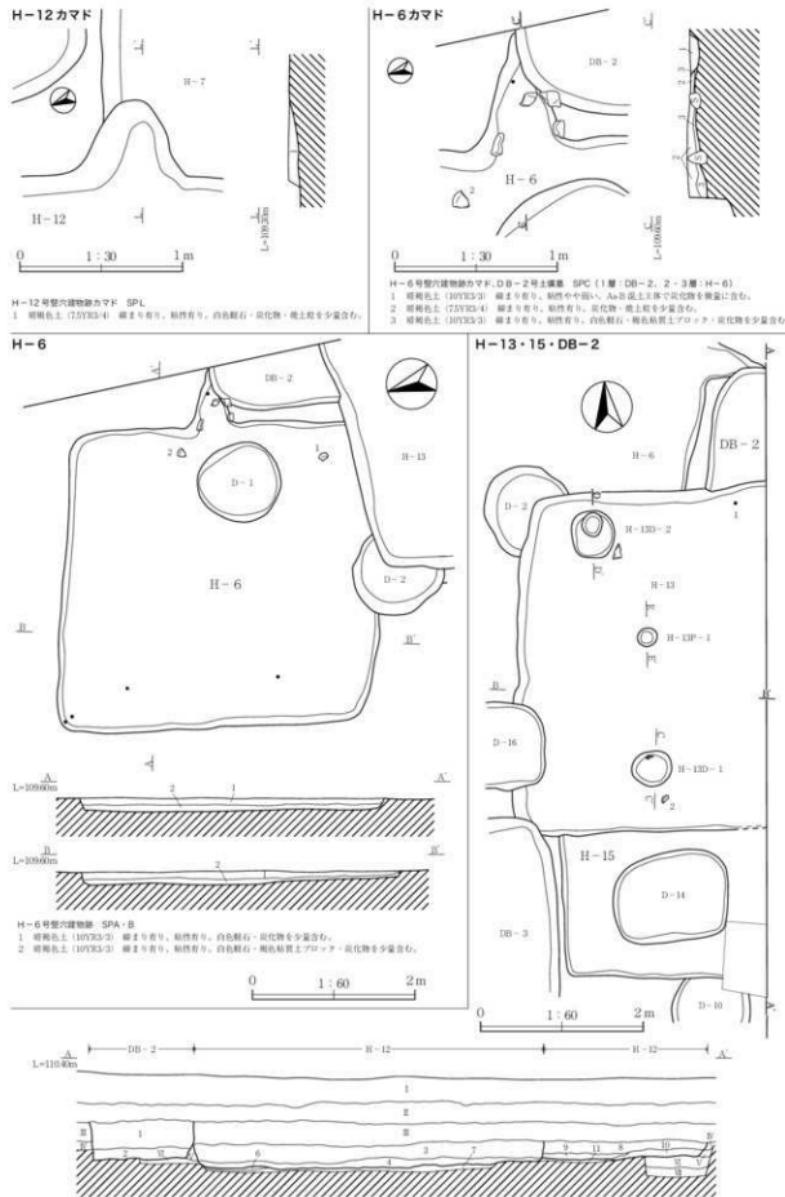


Fig.9 H-2·3·7·11·12号竖穴建物跡、A-1号道路状遺構、W-1号溝、D-8号土坑(2)



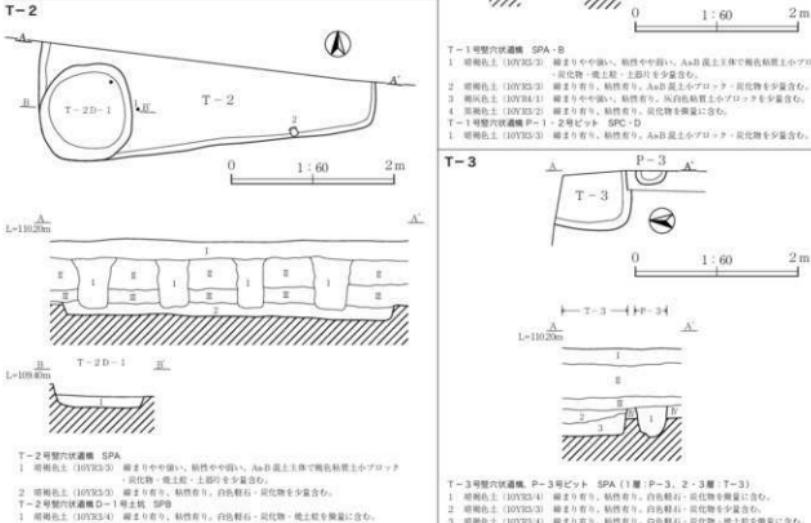
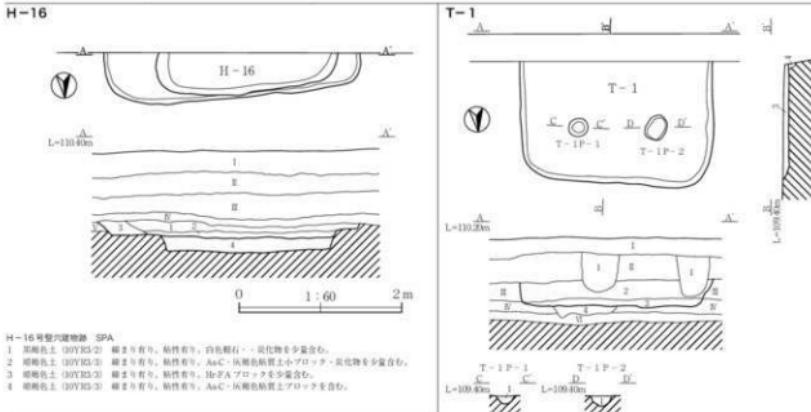


Fig.11 H-13·15·16号竖穴建物跡、T-1~3号竖穴建物跡、DB-2号土壤墓

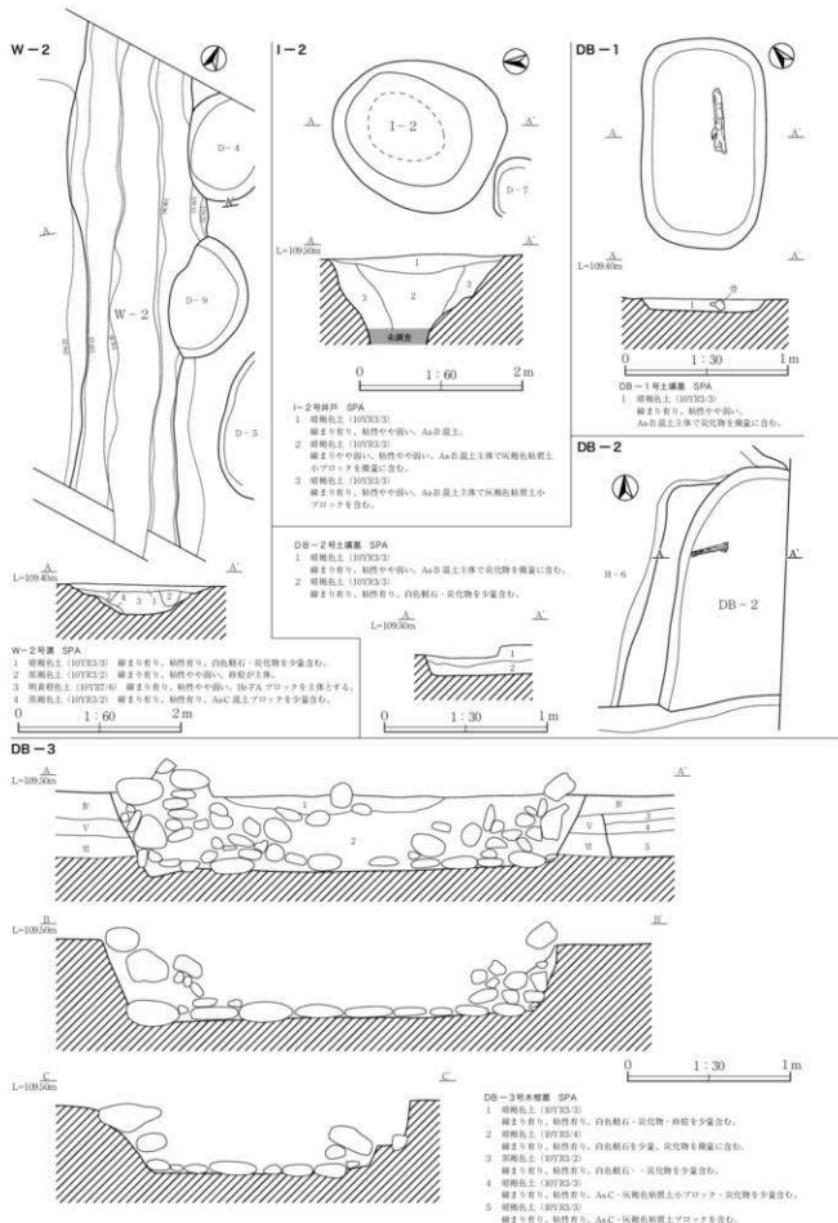


Fig.12 W-2号溝、I-2号井戸、DB-1・2号土壌堆、DB-3号木棺墓

DB-3

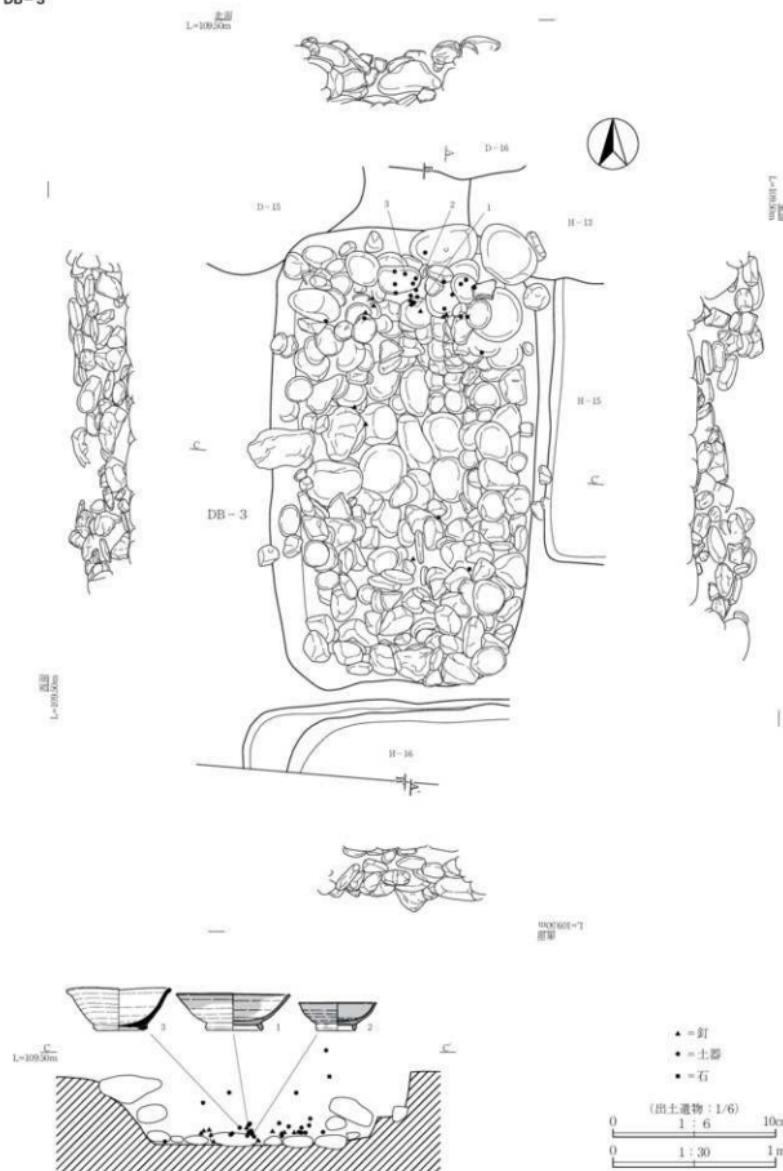
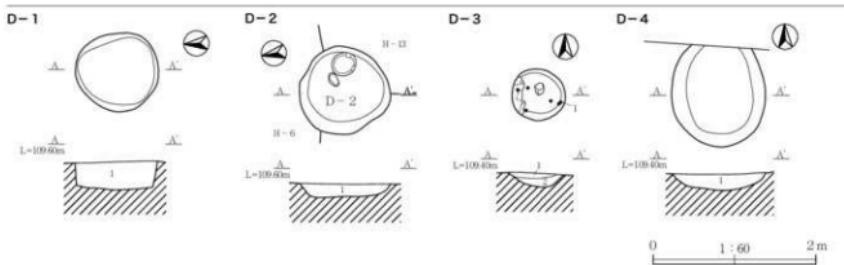
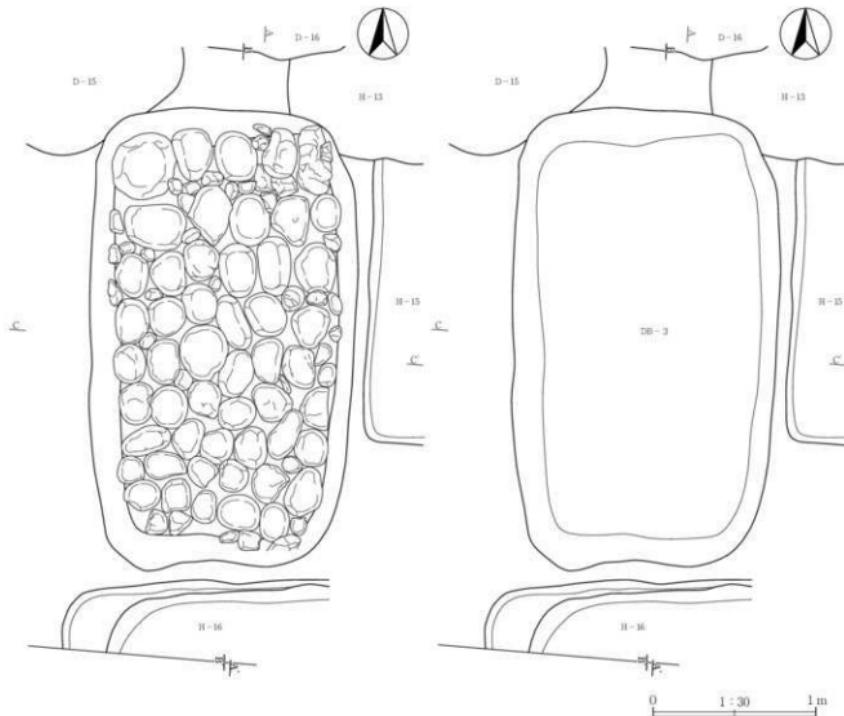


Fig.13 DB-3号木棺墓

DB-3底面敷石

DB-3振り方



- D-1号土坑 SPA
 1 前期粘土 (10Y3/3) 硬まり有り。粘性やや弱い。Ak-B 混土主体で白色粘質土小ブロックを微量に含む。
 D-2号土坑 SPA
 1 前期粘土 (10Y3/3) 硬まり有り。粘性やや弱い。Ak-B 混土主体で白色粘質土小ブロックを微量に含む。
 D-3号土坑 SPA
 1 前期粘土 (10Y3/4) 硬まり有り。白色粘石・炭化物を少量含む。
 D-4号土坑 SPA
 1 前期粘土 (10Y3/4) 硬まり有り。粘性有り。白色粘石・炭化物を少量含む。

Fig.14 DB-3号木棺墓、D-1～4号土坑

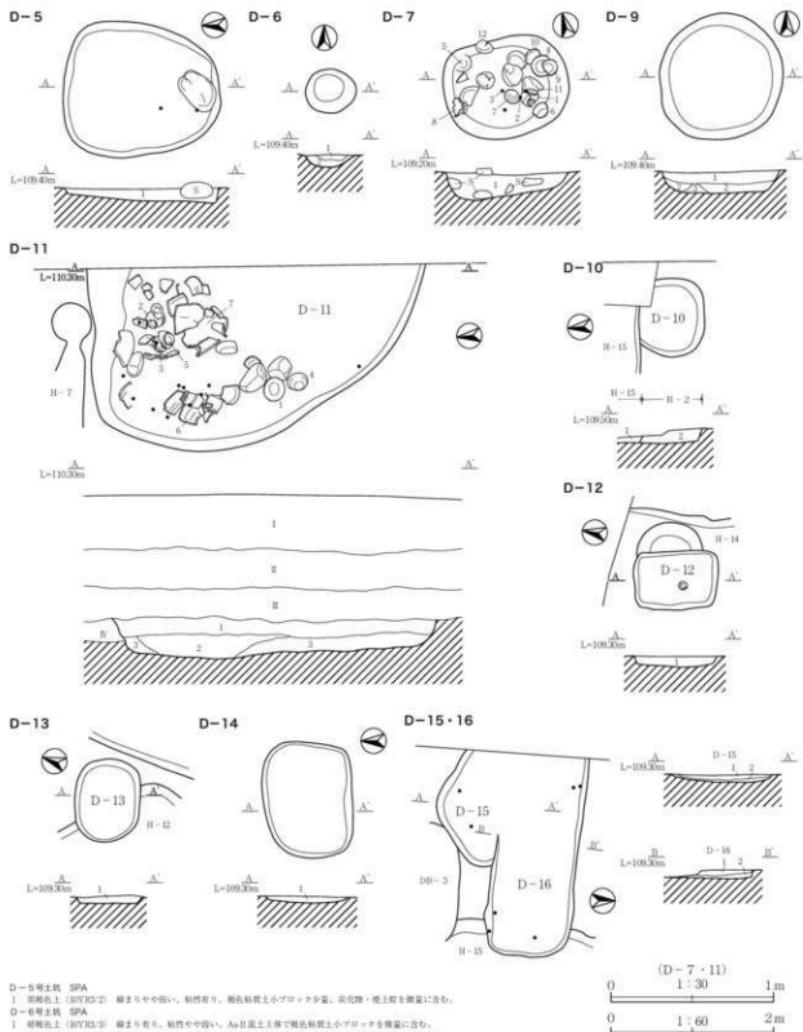
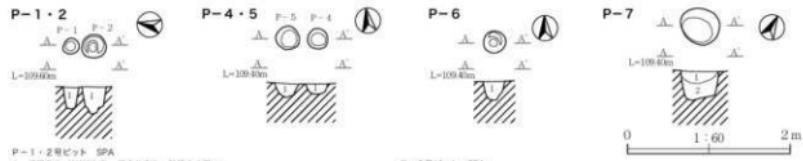


Fig.15 P=5~7:9~16号土壤



P-1・2 号ビット SPA

1 明褐色土 (10YR3/3) 破まり有り。粘性やや高い。
Ab混土土体で褐色粘土小ブロックを微量に含む。

P-4号ビット SPA

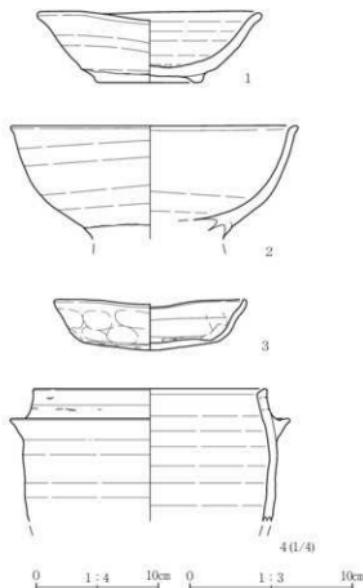
1 明褐色土 (10YR3/4) 破まり有り。粘性有り。炭化物・鐵土粒を微量に含む。

P-5号ビット SPA

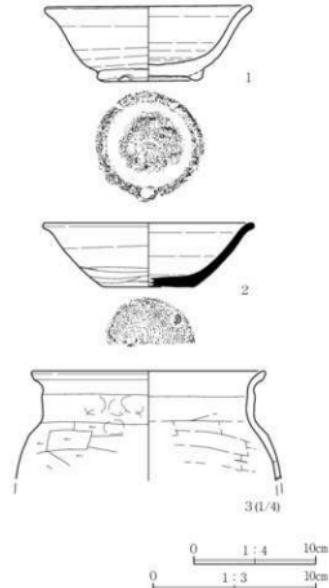
1 明褐色土 (10YR3/4) 破まり有り。粘性有り。炭化物・鐵土粒を微量に含む。

Fig.16 P-1・2・4～7号ビット

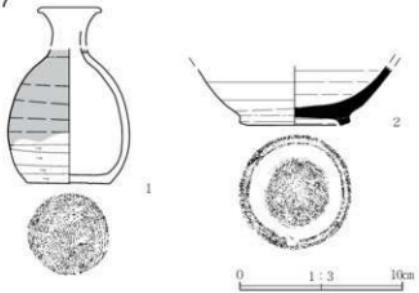
H-1



H-3



H-7



H-6

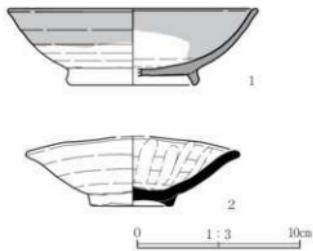


Fig.17 出土遺物 (1)

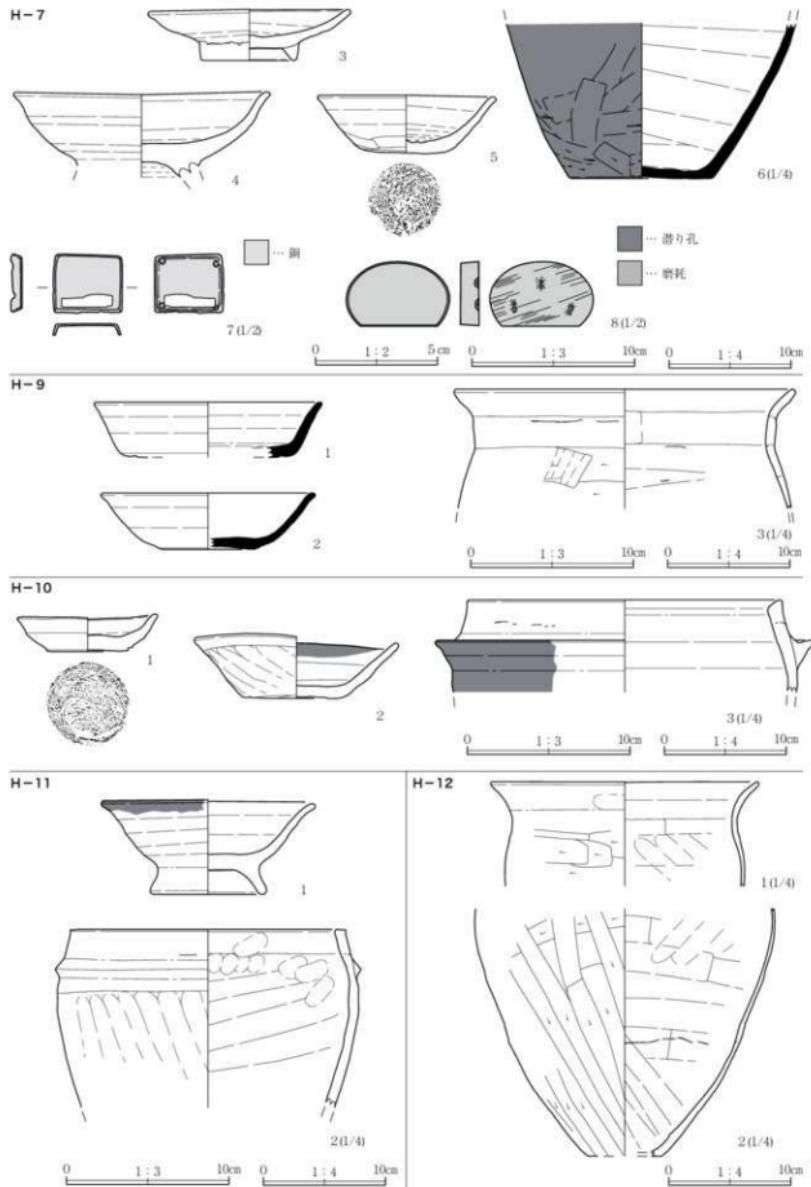


Fig.18 出土遺物 (2)

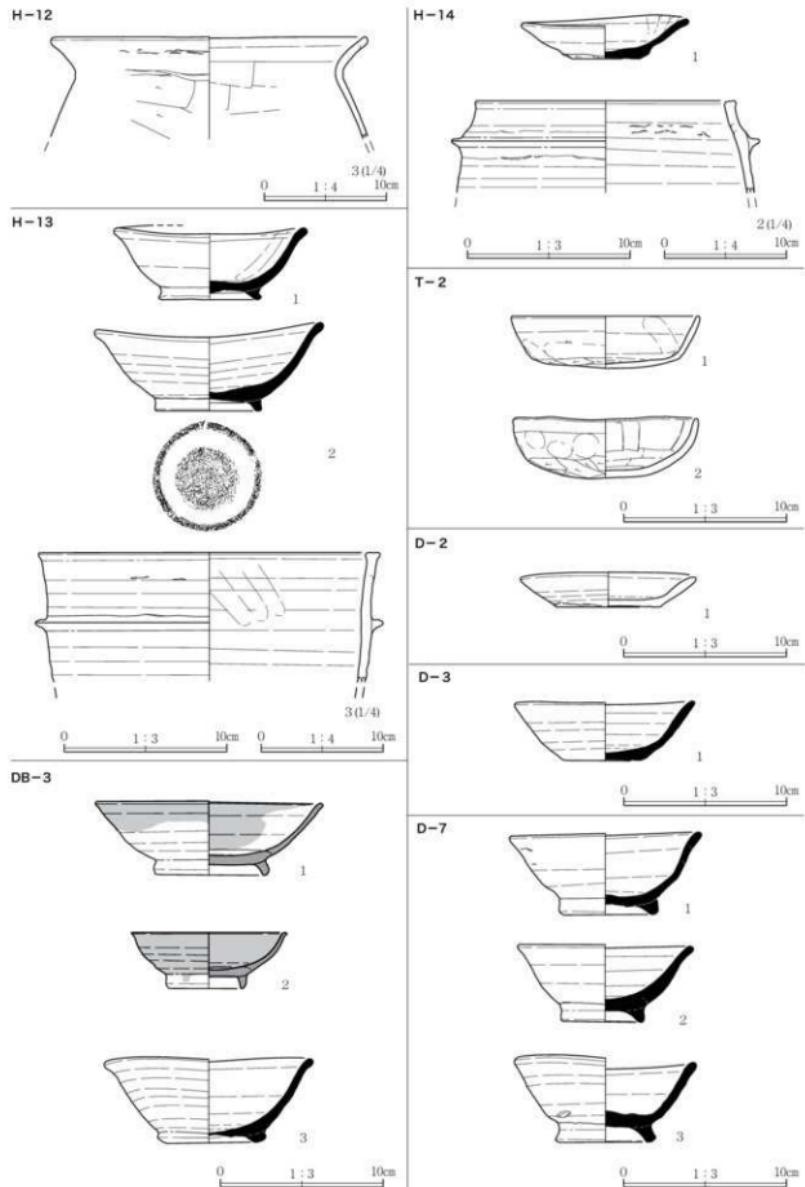
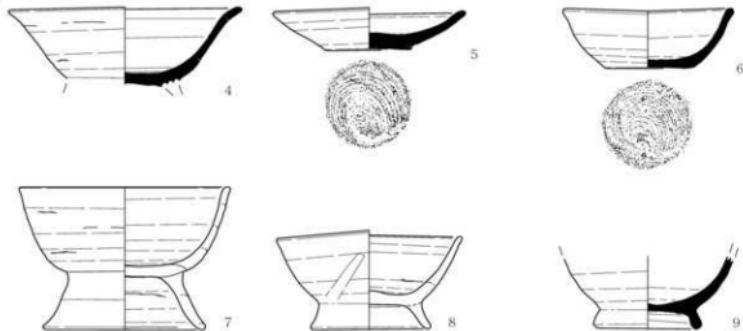


Fig.19 出土遺物 (3)

D-7



4

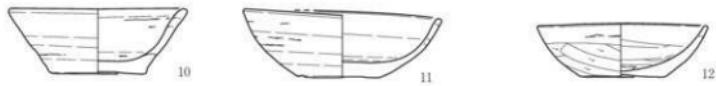
5

6

7

8

9



10

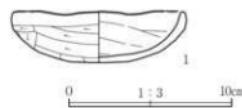
11

12

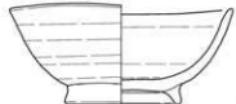


0 1 : 3 10cm

D-10



D-11



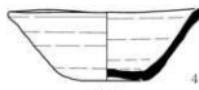
1



2



3



4

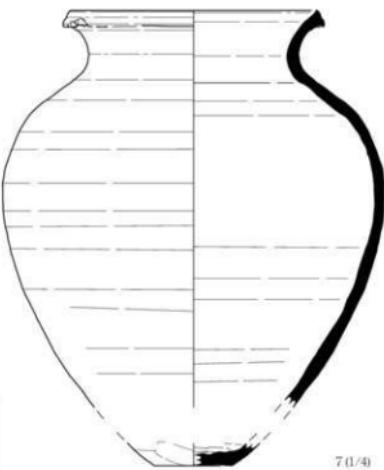
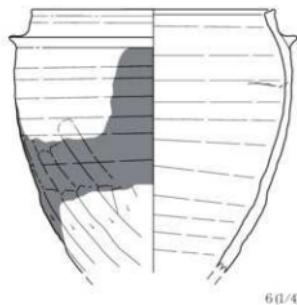


5

0 1 : 3 10cm

Fig.20 出土遺物 (4)

D-11



遺構外



0 1 : 4 10cm

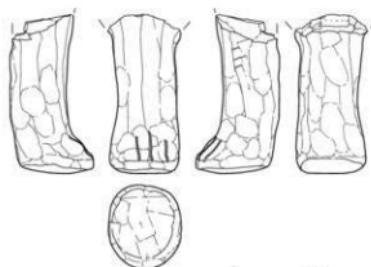
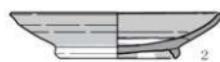


Fig.21 出土遺物 (5)

0 1 : 3 10cm

Tab. 4 出土遺物觀察表

No	出土位置	種別・器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	图形、成・形態、文様等の特徴	現存状況・備考
1	床面	縦唇口 壺	13.8 (6.6)	4.4	底:灰・茶色斑、釋石	陶化焰	に灰・褐色	外面部ロコナザ。底部斜面条切り後、高台貼付け。内面部ロコナザ。		高台一部欠損。
2	カマド	縦唇口 壺	[18.2]	~	底:墨。石斑。白・赤色斑	陶化焰	に灰・褐色	外面部ロコナザ。底部斜面条切り後、高台貼付け。内面部ロコナザ。		2.5残存。高台部欠損。
3	覆土	土罐唇 环	11.6	8.4	33	黒雲母。白・黑・白色斑	良好	明灰素面	外面部底部ロコナザ。体部ユビナザ及びミオビオササ。底部ハカリツサ。 内面部ロコナザ。以下ユビナザ。	完存。
4	カマド	羽垂	[19.2]	~	黒雲母。白・赤色斑。灰・白・黑色斑	陶化焰	明灰素面	外面部ロコナザ。口部内斜面。腰線上に凹み部が窪む。 内面部ロコナザ。		口縁・脚部上半分。高部径(23.2)cm

H-3										
No	出土位置	種別・器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	カマド	温器器 瓢	12.7	6.4	4.6	白色粘土質 灰、茶色灰、 輝石	液化焰	に赤い黄 褐色	外側ロコナデ。底部削除後、高台貼付け。 内面ロコナデ。	完存。
2	床面	温器器 瓢	[13.0]	[5.6]	3.9	灰、茶、黑 色粘土質 灰、輝石	要細	黄褐	外側ロコナデ。底部削除後切口。 内面ロコナデ。	2.5残存。
3	床面	土器器 壺	[19.2]	—	[9.0]	白色粘土 質、灰、茶 色粘土質 灰	良好	に赤い黄 褐色	外側削除ロコナデ、「コ」の字状口縁。胴部上端傾斜 ラテックス付。内面削除ロコナデ。以下削除後ハラナデ。	上縁・胴部上位片 断。

H-6										
No.	出土位置	種別・基盤	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	土質	焼成	色調	图形、成・型・文様等の特徴	現存状況・備考
1	床面	灰褐色陶器 塊	[35.4]	8.0	4.7	白・黒色粒	要焼	灰白 黄斑	外腹ロクナギ。底部約2cm切り後、高台貼付け後。高台内側面にラグラギ。	2/5残存。
2	床面	砾芯器 塔	[33.0]	5.0	4.3	白・黒色粒。 黒色斑。	要焼	灰白 黄斑	外腹ロクナギ。底部約2cm切り後、高台貼付け。内側面にロクナギ。	1/4残存。

H-7									生存状況・備考	
No	出土位置	樹齢、面積	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	地土	焼成	色調		
1	床面	灰塙陶器小瓶	欠損	5.1	(8.4)	白・浅灰色。 直径約3.6cmの 小瓶	堅綿	灰オリーブ グリーン	外表面ロコナダ。底部下部削除。ヘタケズリ。底部に軽く切 欠。内面ロコナダ。	山林部欠損。
2	床面	隨意器 瓶	欠損	6.7	(3.6)	白・黒。 某些色斑。 黒雲母	堅綿	灰白 灰質	外表面ロコナダ。底部削除糸切り後、高台貼付け。 内面ロコナダ。	郭部中位～底部残存。
3	カマド	隨意器 瓶	12.4	5.9	31	灰・黑色粒。 チャート。 黒雲母	酸化焰	に高い温 度	外表面ロコナダ。底部削除糸切り後、高台貼付け後、高台内 部ロコナダ。 内面ロコナダ。	3.5残存。
4	カマド	隨意器 瓶	15.8	欠損	5.3	白色茶色。 白色茶色粒。 黒雲母	酸化焰	灰黄褐	外表面ロコナダ。底部削除出し高台。	4.5残存。
5	床面	隨意器 瓶	10.9	5.4	3.6	系・黑色粒。 白色茶色粒。 黒雲母	酸化焰	橙	外表面ロコナダ。底部削除糸切り。 内面ロコナダ。	3.4残存。
6	カマド	土加熱 壺	欠損	11.7	(12.6)	灰白色。 灰白粗粒。	良好	灰褐	外表面ロコナダ。ヘタケズリとビニチナ。底部削除糸切 り後、ヘタケズリ。中段～底部保有。 内面ロコナダ。	郭部中位～底部残存。
No										
樹齢、面積 口径(cm) 底径(cm) 厚さ(cm)									生存状況・備考	
7	床面	跨筋金具 湯舟	2.4	2.9	0.5	鋼	4.7	緑青	丸金舟。方寸。内面底中央下。下方は長方形の垂孔。(3.3cm × 2.1cm)。表面四隅に底径1.5mmの凹痕を持つ。先端は 欠損。	一部欠損。
8	床面	跨筋金具 丸鉢	2.6	4.2	0.8	玉鉢	17.5	白	手円鉢。表面・側面はよく剥離されている。裏面に斜面剥 離がある。2.1cmの潜りが花が3ヶ所、右下位の孔に欠損 がある。	ほぼ完存。

H-9									現状状況・備考	
No	出土位置	種別	基盤	口徑(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	
1	カマド	窯窓器 壁	[34.0]	[10.2]	(3.3)	白・黑色、 黄色、 チャート。	堅緻	灰白	外表面クロナデ。底部(転落崩壊後)剥離ヘラケズリ。 内面クロナデ。	口縁・底部片。
2	床面	窯窓器 壁	[33.2]	[6.4]	3.5	茶色化、一 箇所丸く白 色剥離	堅緻	黄灰 黒	外表面クロナデ。底部(転落)剥離ヘラケズリ。 内面クロナデ。	L4残存。
3	床面	土器類 壺	[21.0]	欠損	(7.2)	白・黑・ 黑色化、 黒色斑点	良好	明赤系	外表面端部クロナデ、「コ」の字状凹陥。胴部上段窓口へ カスケード状剥離。内面窓口部ヘラケズリ。	山縁・胴部上位。

H-10							地盤性状	地盤内構造(ヨコアシ、斜面アシ)等		
No	出土位置	種別、器種	口幅(cm)	底幅(cm)	高さ(cm)	土質	施成	色調	形態、整型、文様等の特徴	現状状況・備考
1	カマド	縦割、器皿 小鉢	8.6	5.0	24	黑色、 赤褐色粘土物	單面 施成	黒褐色	外縁クロナガ。 底部軸軸切切り。 内面クロナガ。	完存。
2	覆土	土器類 磁	12.6	6.2	37	白色、 黒色斑 母雲母	良好	灰褐色	外縁面部ヨコナガ。 全体ビザギ。 底部ヘラケツリ。 内面輪軸切。	上縁部一部欠損。
3	床面	羽釜	[19.4]	欠損	[5.6]	白色、黒色、 輝石	良好	灰褐色	外縁面部ヨコナガ。 内面輪軸切が混在。 口部内部斜面、斜面 内面輪軸切。	上縁部一部剥落。 断面厚 [23.4] cm

H-11

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	床面	須恵器 壺	13.2	7.1	5.7	白・灰、黒色粒、チャート	焼成	黄	外表面クロナダ。底部削痕有り切。高台貼付け。L1脚部完存。	
2	覆土	羽茎	[22.6]	欠損	[14.5]	灰褐色、～7mm大・白・黒色粒、黒雲母	焼成	明赤系	外表面削ナダ後、脚部底面ユビナダ。口縁部内側、L2脚部平底。脚部断面は三角形状。内面削痕ナダ。	L1縁～脚部中央片。脚部径 [25.5] cm

H-12

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	床面	土師器 壺	[20.0]	—	[8.6]	白・灰、黒色粒、黒雲母	良好	明赤系 黒系	外表面ヨコナダ。L1縁端は広く下脚部上位傾斜ヘラケズリ。内面削痕ヨコナダ。	L1縁部～脚部上位片。
2	床面	土師器 壺	—	[6.0]	[10.1]	白・灰、黒色粒、黒雲母	良好	明赤系 黒系	外表面ヨコナダ。下部削痕から斜傾ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。	脚部下端～底部片。
3	H-12 D-1	土師器 壺	[20.0]	欠損	[8.3]	灰・灰褐色、白色粘物質、輝石	良好	に赤い物	外表面ヨコナダ。L1縁端は平底で厚みを持つ。内面削痕ヨコナダ。脚部ヘラナダ及び傾斜ユビナダ。	L1縁～脚部上位片。

H-13

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	床面	須恵器 壺	[12.0]	6.3	4.4	白・灰褐色、白色粘物質	焼成	黄灰	外表面クロナダ。底部削痕有り切。高台貼付け。	3/5 残存。
2	床面	須恵器 壺	[14.3]	6.5	5.4	黒褐色、白色粘物質	焼成	灰白 黄灰	内面ヨコナダ。底部削痕有り切。高台貼付け。	3/5 残存。
3	覆土	羽茎	12.6	6.2	3.7	白・灰、黒色粒	荒元焼	黒	外表面削ナダ。L1縁部は平底で厚みを持つ。脚部薄壁。	L1縁～脚部上位片。 脚部径 [28.8] cm

H-14

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	覆土	須恵器 壺	10.3	4.2	2.6	白・灰、黒色粒、小嘴	焼成	に赤い物	外表面クロナダ。L1縁端は平底で厚みを持つ。脚部薄壁。	完存。
2	覆土	羽茎	[21.4]	欠損	[7.7]	白色粘物質、灰雲母、チャート	焼成	に赤い物	内面削痕ナダ。L1縫部は平底で厚みを持つ。脚部薄壁。	L1縁～脚部上位片。 脚部径 [25.0] cm

T-2

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	床面	土師器 壺	[11.6]	[8.8]	3.3	黑雲母、チャート	良好	黄	外表面ヨコナダ。体部ヨコナダ。底部ヘラケズリ。	1/2 残存。
1	床面	土師器 壺	11.4	丸底	3.7	黑雲母、白色粘物質、チャート	良好	赤	内面ヨコナダ。体部ヘラナダ及びビビナダ。	3/4 残存。

DB-3

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	底面	灰陶陶器 壺	14.0	6.9	4.5	粘土質、白・黑色粒	焼成	オリーブ 灰 灰白	外表面クロナダ。底部削痕有り後、高台貼付け。高台削痕ヘラケズリ。内面ヨコナダ。	口縁一部欠損。
2	底面	灰陶陶器 小嘴	9.6	4.7	3.5	粘土質、白・黑色粒、白色粘物質	焼成	オリーブ 灰 灰白	外表面クロナダ。底部削痕有り後高台貼付け。灰陶施釉。	3/4 残存。
3	底面	須恵器 壺	12.8	6.6	5.2	灰・黒色粒、白色粘物質、輝石	焼成	黄灰 黒	外表面クロナダ。底部削痕有り後高台貼付け。	口縁一部欠損。

D-2

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	底面	かわらけ	[11.0]	[6.4]	2.1	茶・黑色粒	堅焼	浅黄	外表面クロナダ。底部削痕有り。	2/5 残存。

D-3

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	底面	須恵器 壺	11.0	5.0	3.7	白色粒、黒雲母、輝石	堅焼	に赤い物	外表面クロナダ。底部削痕有り。	ほぼ完存。

D-7

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	基形、成・整形、文様等の特徴	現存状況・備考
1	底面	須恵器 壺	11.8	6.1	5.1	灰褐色、白色粒、黒雲母、チャート粗粒	堅焼	褐灰	外表面クロナダ。底部削痕有り後、高台貼付け。	4/5 残存。 蓋み有り。
2	底面	須恵器 壺	10.8	5.1	4.8	灰色粒、黑色粗粒、白色粘物質	堅焼	褐灰 灰白	外表面クロナダ。底部削痕有り後、高台貼付け。	ほぼ完存。
3	底面	須恵器 壺	11.2	6.1	5.1	灰褐色、輝石	堅焼	褐灰 褐灰	外表面クロナダ。底部削痕有り後、高台貼付け。	完存。 蓋み有り。
4	底面	須恵器 壺	14.4	欠損	[4.8]	茶色粒、黒雲母	堅焼	灰白 黄灰	外表面クロナダ。底部削痕有り後、高台貼付け。	口縁の一部及び高台部分欠損。

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	地土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
5	底面付近	罐形器 环	11.8	5.4	2.5	灰・茶色粘、白色粘物質、薄石、サトウ?	堅焼	灰白	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け。内面部クロナデ。	ほぼ完存。
6	底面付近	罐形器 环	[10.2]	5.4	3.7	白・黑・茶色粘、薄石	堅焼	黒褐	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け。内面部クロナデ。	3/4残存。
7	底面付近	罐形器 瓶	[13.0]	10.0	8.8	黑・茶色粘、白色粘物質	融化焰	褐	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け。	1/2残存。
8	底面付近	罐形器 瓶	11.4	7.4	6.1	白・黑・茶色粘	融化焰	明赤褐	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け。	4/5残存。
9	底面付近	罐形器 瓶 欠損	6.5	(4.0)	-	白・黑・灰・茶色粘	堅焼	灰褐	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け。内面部クロナデ。	体部中段～底部残存。
10	底面付近	罐形器 环	10.9	5.9	4.1	系統粘、黑・青色粘、白色粘物質	融化焰	褐	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、ペテナデ。内面部クロナデ。	ほぼ完存。
11	底面付近	罐形器 瓶	12.2	5.3	4.2	黑色粘、黑色粘物質、薄石	融化焰	にぶい黒	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、内面部クロナデ。	口縁部一部欠損。
12	底面付近	土罐器 环	[10.7]	5.2	3.5	白・黑・茶色粘、薄石	直焼	明赤褐	外面部深紅ヨコナデ。体部ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面部深紅ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	2/5残存。

D - 10

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	地土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	底面付近	土罐器 环	[10.6]	丸底	3.2	白・茶・黑色粘、薄石	良好	褐	外面部深紅ヨコナデ。体部の横に僅かな擦を有して以下、体部から底部へナズリ。内面部クロナデ。	2/5残存。

D - 11

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	地土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	底面付近	土罐器 瓶	[10.6]	丸底	3.2	白・茶・黑色粘、薄石	良好	褐	外面部深紅ヨコナデ。体部の横に僅かな擦を有して以下、体部から底部へナズリ。内面部クロナデ。	2/5残存。
2	底面付近	罐形器 瓶	11.8	6.5	4.9	白・茶色粘、黑色粘	やや融化焰	黄黄褐	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け。	4/5残存。
3	底面付近	罐形器 瓶	12.1	6.3	4.6	黑色粘、白色粘物質、チャート	やや融化焰	にぶい黄	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け。内面部クロナデ。	口縁部一部欠損。
4	底面付近	罐形器 环	12.3	5.0	4.5	黑色粘、白色粘物質、チャート	堅焼	黒褐	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け。内面部クロナデ。	完存。
6	底面付近	引手	[20.0]	欠損	(21.6)	灰・黑色粘	薙元焰	灰白	外面部深ナデ。口縫は内側し、口唇部は平坦で内斜。肩上に2つ穴が有る。腹部中段以下削輪ナデ。斜傾ヘラケヌ。肩部径(33.4)cm 肩み有り。	口縁～脚底下位1/2残存。肩部径(33.4)cm 肩み有り。
5	底面付近	罐形器 瓶	[13.7]	7.4	6.5	黑色粘、黑色粘、白色粘物質	融化焰	にぶい青	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け。内面部クロナデ。	2/3残存。
7	底面付近	罐形器 瓶	20.8	[6.6]	[37.3]	白・黑・茶色粘、薄石	やや融化焰	脚灰	外面部深ナデ。口縫は11.3mmの両端を突出させ。中段に僅かな凹凸が有る。内面部深ナデ。中段は土苔表面の剥落跡有。	口縁～底部。脚部下位欠損。

調査区

No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	地土	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	調査区一括	繩縄陶器 雷紋花文瓦	欠損	欠損	(1.5)	粘土質、黑色粘	堅焼	緑	外面部クロナデ。底部高台貼付け。縫隙施釉。内面部クロナデ。見込みに壓刻した花文。縫隙施釉。	脚部下位～底部。肩台欠損。
2	覆土	灰縄陶器 瓶	[13.2]	7.1	2.8	粘土質、白・黑色粘	堅焼	灰白	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け後、高台貼付け。斜傾ヘラケヌ。	2/3残存。
3	調査区一括	罐形器 瓶	10.8	5.5	4.7	灰・黑・茶色粘	堅焼	黄灰	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け。内面部クロナデ。	口縁部一部欠損。
4	調査区一括	罐形器 瓶	14.4	7.5	5.6	灰・茶色粘、白・石英の白色粘物質、チャート	堅焼	灰	外面部クロナデ。底部削輪系切り後、高台貼付け。内面部クロナデ。中段以下ハナクによる削輪ナデ。	完存。並み有り。
5	調査区一括	罐形器 环	13.5	6.5	3.6	白・黑・茶色粘	堅焼	灰灰黑	外面部クロナデ。口縫部外観。底部削輪系切り。	口縁部一部欠損。
6	調査区一括	罐形器 环	[13.2]	[9.8]	4.0	白・茶色粘、黑色粘、白色粘物質	堅焼	灰白	外面部クロナデ。底部削輪系へラケヌ。全面に自然堆積物。	口縁～底部。
7	覆土	罐形器 瓶	[13.4]	6.5	5.1	茶色粘、黑色粘、チャート	やや融化焰	にぶい青	外面部クロナデ。底部中段クロナデ後、高台貼付け。内面部クロナデ。	2/5残存。
No	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	材質	焼成	色調	断面、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
8	調査区一括	單足器 地脚付円筒形	(9.8)	(4.5)	5.1	白色粘物質粘、黑色粘	堅焼	灰灰	手作後、脚部高台へラケヌ及びユビナデ。正面下段の舟3ヶ所にはハナクによる削輪。足裏面へラケヌ及びユビナデ。上部は複数部との接合面。	脚部一足完存。背面縁の痕跡。

VI まとめ

西部第一落合遺跡群（4）の発掘調査において得られた成果から特徴的な遺構・遺物について検討を行い、まとめとしたい。

本遺跡周辺の景観想定

本遺跡周辺の土地利用の変遷については西部第一落合遺跡群（2）のまとめに記載されているが、これに本遺跡の調査成果を加えて改めて本地域の景観想定を行ってみたい。

今回の調査で竪穴建物跡は16軒確認され、その内9世紀代以降の建物跡は14軒を数える。9世紀代以降が多い傾向は周辺遺跡と同じ様相を示している。それまで集落が点在していたこの地域は9世紀に入ると広範囲に集落が営まれるようになったと推測される。

本遺跡W-2号溝は覆土中にAs-C混土を含むことから古墳時代の溝と想定される。走行方向は北西-南東方向を向く。北には西部第一落合遺跡群（1）W-1号溝（以下、落合1W-1）が存在するため、ここから水を取り入れたと考えられる。落合1W-1と本遺跡W-2号溝との比高差は約50cm。本遺跡W-2号溝の方が高いため、何かしらの手段で引水していたと推測される。周辺では古墳時代の遺構は畠跡しか確認されておらず、同時代の集落は確認されていない。今後の調査成果の増加によってこの溝の性格が明らかにされることに期待したい。

鈎帶金具について

H-7号竪穴建物跡から銅製巡方と石製丸柄の2つの鈎帶金具が出土した。鈎帶金具とは革帯に付けられる飾金具のこと、方形や半円形を呈する金属や石材を用いて作られたものである。律令期の官人が着用していた腰帶に付けられていたとされている。文献資料では『西宮記』「和同四年 革帯始用云々」と記載があることから和同四年（711）には革帶の使用が始まったとされている。『統日本紀』和同五年（712）五月癸酉条には官位が六位以下のものは銅と白鉛・錫との合金を持って腰帶を飾ることを禁止すると記載されていることから、金属製の鈎帶金具の存在が確認できる。養老二年（718）に制定された『衣服令』によれば、官位が五位以上は金銀腰帶、六位以下は烏油腰帶⁽¹⁾を着用するように規定されている。『日本後紀』延暦十五年（796）十二月辛酉条には、これ以降金属製鈎帶の使用を禁止される事項が記載されている。このことから金属製の鈎帶金具の使用期間は711年から796年までとされている。⁽²⁾

本遺跡で出土した鈎帶金具を見てみよう。铸造品と考えられる銅製の巡方は縦幅に対して横幅がやや長い方形を呈している。正面下方には長方形の垂孔が空けられており、裏面は中空、四隅には帯に装着するための鉢（脚鉢）を備えている（全て欠損）。革帶への装着は表金具と裏金具で革帯を挟み込み、かしめて留める方法である。丸柄は白色の玉髓（瑪瑙）を用いて半円形状に作られた石製品である。表面と側面は良好に研磨され、裏面には斜位の擦痕が確認できる。また裏面には2孔1組の潜り孔が3ヶ所設けられており、この孔に銅線を通して革帶へ装着していたと考えられる。

田中広明氏は材質・形状等から鈎帶金具の型式分類を行っている（田中1990）。この分類によれば、それまで刀や剣などの腰佩を垂下させる装着孔として備わっていた垂孔が垂下具の消滅によって形骸化していく。铸造品においては金具の幅1/2程度の大きさがあつた孔（大孔）は徐々に小さくなり（小孔→細長孔）、

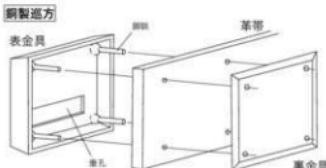


Fig.22 鈎帶金具装着状況模式図（木村2002を一部改変）

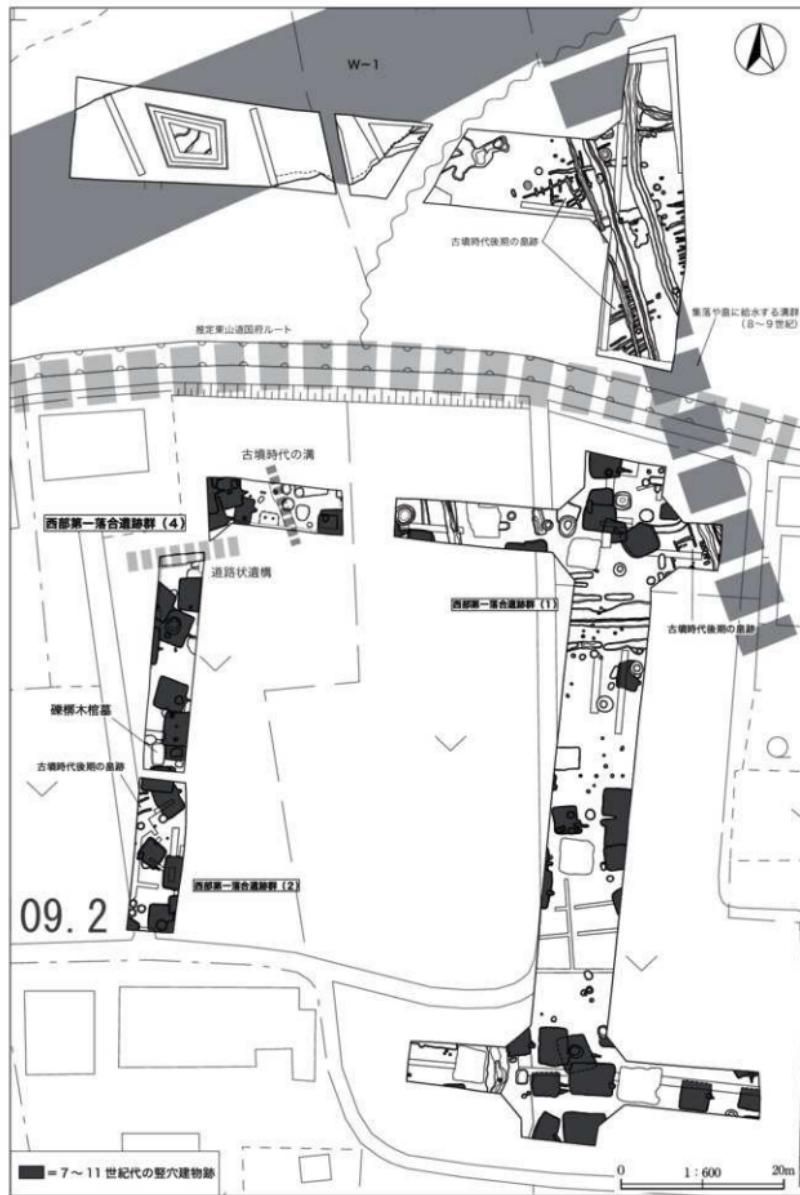


Fig.23 西部第一落合遺跡群（4）周辺の景観想定図

最終的には無くなってしまい（無孔）、石製品では小孔→線孔→無孔となる変化が見られるとしている。また田中氏は堅穴住跡から出土した鉄製品をまとめ、出土遺構や共伴遺物の年代から大孔は8世紀後半四半期、小孔は8世紀後半四半期、細長孔は9世紀後半四半期、無孔は10世紀後半四半期に出土のピークが見られるとしている（田中2002）。本遺跡の巡方（鉄製品）をこの分類に当てはめると細長孔となる。細長孔の出土ピークが9世紀後半四半期になると、巡方が出土した建物跡の年代観が9世紀後半と想定していることから、ピークよりやや後の減少する時期のものと考えられる。無孔（石製品）の鉄帶金具は8世紀後半に出土が見え始め、以降出土量が増加し10世紀後半四半期をピークとしている。本遺跡の丸軸は出土遺構の年代観から增加傾向にある9世紀代のものとして想定したい。

DB-3号木棺墓について

調査区南隅で確認されたDB-3号木棺墓は、長方形状のモノを囲むように石が組まれている事、木質を含んだ鉄釘が多数出土している事、遺構内北側に壇・塚類の出土が集中している事から礎壇木棺墓であると想定した。墓内側面を石で囲っている浜川市白井掛岩遺跡46号土坑や木棺を平衡にするための台石を備える元経社蒼海遺跡群（130）1区DB-1など石材を用いた土壙墓・木棺墓の出土事例は数例あるものの、多量の川原石を用いて、一見して古墳の礎壇墓に思えるような石組の古代の墓は類例が見つからない。そこで木棺墓の視点から考察を行い、この墓の性格を検討してみたい。

加藤真二氏は畿内地域（奈良・京都・大阪）における8～10世紀初頭の木棺墓30例を集めて分析している（加藤1997）。木棺墓出現期とされる8世紀後半の段階では律令官人層の墓とし、いずれも櫛を持つ構造であることから、当初は櫛と木棺は一体のものと想定された。8世紀末から9世紀中頃になると木棺墓は多様化し、それまで埋納されていた官的な副葬品を持たず、櫛を設けない木棺墓が出現する。この墓制の変化は官人層とは別の経済的に富裕な階層の人々が新たに木棺墓を受容し始めたことに起因するという。9世紀後半以降は大量に土器を副葬する事例が出現し、官人層とみられるものが激減、官人層は木棺墓から離れ火葬墓へと回帰する。この頃の木棺墓の造営主体は富裕な階層の人々へと移っていった。本遺跡の木棺墓は出土遺物から10世紀前半頃と推定されている。加藤氏の分析に従えば本遺構は官的な副葬品は見られないことから被葬者は経済的に富裕な階層の人であったと考えられる。さらに石櫛を備えていることから、より階層が高い人物であったと想像される。

ではなぜこのような富貴階層の墓が同時代の集落が広がるこの場所に設けられたのだろうか。『日本後紀』延暦十六年（797）正月壬子条に「山城国愛宕・葛野両郡では人が死ぬと住宅地のかたわらに埋葬することが慣りとなっている」とあり、8世紀末には家の間に死者を葬る風習が存在していたことがわかる。本遺跡の木棺墓は屋敷地の内部や隣接した場所に造られる「屋敷墓」のようなものだったのではないだろうか。屋敷地は不明ではあるが、この地域に関わりの深い人物であったと推測される。

本遺構の被葬者はこの地域の有力者であり、9世紀以降集落が多く営まれるようになる落合地区の開発に携わっていた人物であったのかもしれない。

註

1. 黒漆を塗った銅製の鉄帶金具を用いた腰帶と考えられる。
2. 延暦十五年（796）以降禁止されていた金属製の腰帶は、『日本後紀』弘仁元年（810）九月乙丑条に「大同二年（807）の命令によって禁止されていた雜石を用いた腰帶は材料も得やすく、造って売る人も多く、破損しにくい。頭の腰帶は誰が使ってるので動くと脱落し易い。雜石も頭も価値がほほ同じであることから、雜石の腰帶を用いることをこれ以降許可する」と記載されており、796～810年の間は使用されていたと考えられている。
3. 白井掛岩遺跡46号土坑は規模392m×132m、深さ0.45～0.60mの長方形の土壙墓と考えられる。扁平な川原石を側面に立てて区画し、底面長軸方向に石を敷く。木棺の台石か。10世紀後半。

4. 元経社蒼海道跡群（130）1区DB-1は規模（156）m × 0.70 m、深さ0.40 mの長方形の木棺墓と考えられる。釘釘9点出土。木棺を平衡に置くための台石を底面に備える。10世紀。
5. 「彼葬者が官人であることを確定しうる腰帶、冠を戴す」（加藤1997）。
6. 屋敷墓は平安時代後半から鎌倉時代を中心に、屋敷地の内部や隣接した場所に墓が1～2基造られる墓をいう。屋敷を設け周囲を開墾した開発領主の墓や、屋敷神として先祖を祭ったものと考えられている。（文化庁2016 p.197）

参考文献

腰帶金具

- 田中広明 1990 「律令時代の身分表象（I）－帯飾具の生産と変遷－」『土曜考古』第15号
田中広明 1991 「律令時代の身分表象（II）－腰帶をめぐる人々の奈良・平安時代－」『土曜考古』第16号
武田能知子 2002 「律令衣服令と帶」「腰帶をめぐる諸問題」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所飛鳥奈良宮跡発掘調査部
高島英之 2002 「文獻資料からみた日本古代の腰帶」「腰帶をめぐる諸問題」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所飛鳥奈良宮跡発掘調査部
木村恭彦 2002 「胸鈔から石鈔へ」「腰帶をめぐる諸問題」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所飛鳥奈良宮跡発掘調査部

木棺墓

- 加藤真二 1997 「木棺墓SX6428について」『平城京在京七条一坊一五・一六坪』奈良国立文化財研究所学報第56冊 奈良国立文化財研究所
森田 伸 2006 「日本後紀」（上）講談社
文化庁文化財部記念物課 2016 「定本 発掘調査のてびき－集落道路発掘編－」同成社
浜川市教育委員会ほか 2016 「白井掛岩道路」
渡邉邦雄 2018 「墓制にみる古代社会の変容」 同成社
前橋市教育委員会 2019 「元経社蒼海道跡群（130）」
山口博之 2020 「秋田県横手市船尾道路の解説墓－東北・北海道にみる中世初期の墓－」『東北文化研究所紀要』第52号 東北学院大学東北文化研究所



調査区全景（南から）



調査区全景（東から）



H-1号竪穴建物跡全景（南から）



H-1号竪穴建物跡カマド全景（西から）



H-2号竪穴建物跡全景（西から）



H-3号竪穴建物跡全景（南から）



H-3号竪穴建物跡全景（西から）



H-4・5号竪穴建物跡全景（西から）



H-6号竪穴建物跡全景（西から）



H-6号竪穴建物跡カマド全景（西から）



H-7号竪穴建物跡全景（西から）



H-7号竪穴建物跡カマド全景（西から）



H-8号竪穴建物跡全景（西から）



H-9号竪穴建物跡全景（西から）



H-9号竪穴建物跡カマド全景（北から）



H-10号竪穴建物跡全景（西から）



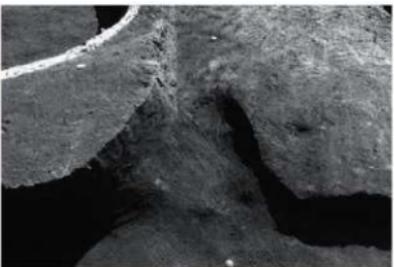
H-10号竪穴建物跡カマド全景（西から）



H-11号竪穴建物跡、D-8号土坑、W-1号溝全景（西から）



H - 12号竖穴建物跡全景（西から）



H - 12号竖穴建物跡カマド全景（西から）



H - 14号竖穴建物跡全景（西から）



T - 1号竖穴状遺構全景（西から）



T - 2号竖穴状遺構全景（西から）



T - 3号竖穴状遺構全景（西から）



W - 2号溝全景（南から）



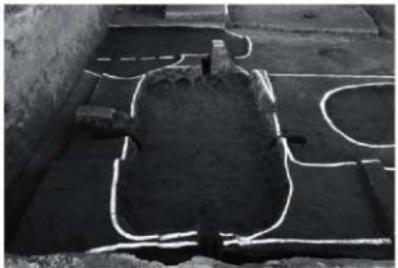
I - 2号井戸全景（西から）



DB-3号木棺墓全景（西から）



DB-3号木棺墓底面敷石全景（西から）



DB-3号木棺墓掘り方全景（南から）



調査区北側全景（東から）



調査区南側全景（南から）









報告書抄録

カタカナ	セイブダイイチオチアイセキダン (4)
書名	西部第一落合遺跡群 (4)
副書名	前橋都市計画事業西部第一落合地区調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ番号	
編著者名	岡野 茂
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0033 群馬県前橋市下小町 1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市松町3丁目11番4
発行年月日	2022年3月25日

フリガナ	フリガナ	コード	位置	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	
西部第一落合遺跡群 (4)	群馬県前橋市元郷町4丁目1-1 749, 751-1, 751-2	102016	3A269	36°22'57"	139°02'16"	20211011 / 20211130 272m ² 前橋都市計画事業 西部第一落合 地区調査事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西部第一落合遺跡群 (4)	集落	古墳時代	溝	土器	
		奈良・平安時代	堅穴建物跡 堅穴状遺構 道路状遺構 井戸 木棺墓 土坑・ピット	灰陶器 縁輪陶器 扇形器 土器 鍍金装飾 石製丸納	・堅穴建物跡（9世紀後半） から跨帶金具が2点出土。 ・10世紀前半の石棺木棺墓
		中世	土器墓 土坑・ピット	かわらけ	

西部第一落合遺跡群 (4)

前橋都市計画事業西部第一落合地区調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022年3月11日 田嶋
2022年3月25日 発行

発行 前橋市教育委員会事務局文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市松町3丁目11番4

TEL 027-290-6511

編集

技研コンサル株式会社

印刷

朝日印刷工業株式会社